

自閉症に関する研究

——VTRによる治療過程の分析——

丸井文男 蔭山英順* 加藤義男*
神野秀雄* 沼尾孝平* 生越達美*
佐藤勝利** 小沢久美子*** 関田紀子****

I はじめに

昨年(1970年)の本紀要17巻において、われわれは、集会的個人遊戯療法(Collective individual play therapy)という自閉症児の治療の新しい方法を試みたが、それによる治療の変化の過程を8つの事例について各事例ごとに、5つの大カテゴリーと、28のサブカテゴリーに分類し、治療の時期に表示し、かなり詳細な記述を加えた。この方法は、従来から、臨床心理学をはじめ、臨床的な事例の扱いに、広く行なわれてきたものである。

このような丹念な記述による方法は、治療者が治療場面における被治療者とのかかわりでの体験や、観察、親からの情報などを網らし記載することによって、治療過程やその変化を把握することができる。

しかし、一面、臨床の研究分野で、常に課題とされてきている、客観的伝達性、即ち、一般化への方法としては、必ずしも十分なものとはいえない弱点をぬぐいさることができにくい面を蔵しているものである。

近年カウンセリングでは、ことに client centered method において Rogers. C. らによって、言語を媒介とするカウンセリング過程における client の内面的変化をはじめ、therapist の変化をも tape recorder を再生、分析することによって、上述の目的に近い成果を上げ、ひろく普及されてきている。

しかしながら、遊戯療法(play therapy)即ち、言語を媒介としないで、play 場面における行動を通じての被治療者、治療者とのかかわりによる方法では、前述のような客観的な伝達性をもつまでには、いかなかった。

われわれは、実際に、乳児や児童を対象とする際のみならず、心理的治療を試みる場合には、治療の効果が上

がり、その目的を達すれば、こと足りるともいえようが、方法的な面では、一步一步前進する必要があることは当然である。

今回は、前回の研究報告に関連して、VTR(video tape recorder)を用いて、治療過程を詳細に分析して、治療の変化の客観化を意図したものである。

われわれは、1969年3月以来、この集会的個人遊戯療法を開始したが、当初から、大部分の機会にVTRを撮ってきたので、その資料について分析を試みた次第である。

II 目的

前述したように、遊戯療法場面における治療過程を追跡し、それを分析することによって、治療過程の客観化を試みるのが目的であるが、その際、遊戯治療室という限られた場所なので、治療中のすべての被治療者の行動を追跡し、VTRに集録することは不可能である。従って、当然、遊戯治療室におけるVTRの撮影可能な事例を選択した上、更に、治療室内における client 対 therapist の関係を中心に分析を試みた。

III 手続

1. 研究グループの編成

1969年3月以来、延20名近い治療者がこのグループに参加したが、児童担当者、親担当者に分かれた時期と、親の治療を集団法にし、更に、メンバーも若干変化している。しかし、参加者は、週1回以上の conference によって、多くの事例についての治療過程の討議に参加した者である。

今回は、これらのうち、VTRの過程分析及び討議に参加し得た9名によって編成された。

2. 対象

***** 1971年5月以後、教育学部内に新たに、特殊実験棟ができ、そこに2つの play room が設けられたため、1969年3月～1971年4月までと部屋のちがいはあるが、構造上には、問題にする程の差異はない。

* 大学院学生 *** 大学院研究生

** 中部工業大学講師 **** 研究補助員

本研究の一部は、文部省の昭和46年度科学研究費及び昭和46年度厚生省心身障害研究費の補助金の援助によるものである。

自閉症に関する研究

1970年の研究報告の自閉症児の8例のうち、前述したように、collective individual playtherapyに参加を継続し、且つVTRの分析の可能なものうち、治療過程の変化がそれぞれ特徴的と思われる3例を対象として選択した。

なお、これらの3例とも、現在も治療の継続中であり、昨年の研究報告の内容以上に、かなり大きな治療的变化をみているものもあるが、全部の分析を実施することは、長時間を必要とすることもあり、今回は、前回の報告の記載された時期にとどめた。

なお Table 1 に示すように、各期ごとの期間の幅は必ずしも一定でない。

これは、前回の研究報告の記載されている時期に準拠し、そのなかで、1時期のうち前半、後半とわけた方がのぞましいと治療者が判断したものは、それぞれA、Bと分けて分析を行なった。

3. サンプルVTR

上記の3ケースのVTRの中から、

- (1) 他の患児の欠席がなく、集合的個人遊戯療法の特徴をよく備えているものであること。

- (2) 前報に示した対象児の治療による変化過程の各期のニュアンスを比較的よく伝えているものであること。
 (3) VTRの映像が比較的鮮明であり、分析に耐えうるものであること。
 (4) 10分前後に亘って対象児の行動が収録されているものであること。

の4条件を勘案して、それぞれの対象児を担当してきたセラピストが、前報告に示した各期について、それぞれ2回のセッションを含むよう、サンプルの抽出を行なった。しかし種々な条件でサンプルを抽出したので、抽出された各事例の各セッションは、それぞれの治療過程の変化の時期を代表しているとは必ずしもいえない。なお、鈴〇〇〇美については、担当セラピストの交代等の事情があり、直接担当者による抽出はできなかったが、極力適切なサンプルを抽出するよう努めた。また、同児および大〇登の2ケースについては、VTRの関係上、それぞれ第II期、第I期のサンプルが1回のみセッションしか採用できなかった。

各ケースについてのサンプルは Table 1 に示す通りである。

Table 1

サンプルを抽出したVTR*

期	1 期		2 期		3 期		4 期	
	A	B	A	B	A	B	A	B
鈴 〇 〇 〇 美	1969.7.18 9'00"	1969.8.1 8'00"	1969.10.17 8'00"	---	1970.1.9 10'00"	1970.3.18 8'30"	1970.7.15 8'00"	1970.9.9 10'00"
高 〇 〇 子	1969.9.12 10'00"	1969.10.17 10'00"	1970.3.27 10'00"	1970.4.22 10'00"	1970.8.26 10'00"	1970.10.7 10'00"	---	---
大 〇 登	1969.8.1 10'00"	---	1970.4.22 10'00"	1970.5.20 10'00"	1970.7.1 10'00"	1970.9.9 10'00"	---	---

* 上欄 治療の行なわれた日付 下欄 サンプルVTRの長さ

4. 分析単位 (unit)

(1) 逐語的記録の作製^{**}——各サンプルVTRについて、担当セラピストがVTRを再生しながら、その中の対象児（以下クライアントと呼ぶ）および、セラピストの行動を逐語的に記録した。ただし、鈴〇〇〇美については前項と同様である。

なお、この際、次の2点に留意した。

- 1) overt な行動のみを記述し、解釈的記述は用い

* VTRの映像を記述するのに“逐語的”というのはおかしいが、映像による行動をできるだけ細く丹念に記述したのでこう呼んだのである。

いこと。

2) 同一行動をセラピスト、クライアント双方から記述しないこと（例；C：Tをペコペコハンマーで叩く、T：叩かれる、とはしないで、C：Tをペコペコハンマーで叩く、にとどめる）

(2) 分析単位 (unit) の決定——こうして集められた逐語的記録とVTRとをもとにして、われわれ全体の討論により、unit を決定した。この時の基準は以下の2点である。

- 1) 1つの行動は1unit とする。
 2) 同時に生じた行動は1unit とする。

Table 2 分析カテゴリー

セラピストの行動の分析			クライアントの行動の分析		
カテゴリー	サブカテゴリー	項 目	カテゴリー	サブカテゴリー	項 目
TAB	I 働きかけ	(1) 制止・禁止 (2) 指示・働きかけ	CAB	I 働きかけ	(1) 指示・働きかけ・命令 (2) 誘引 (3) 攻撃
	II 弱い働きかけ	(3) 助力 (4) 模倣 (5) 注視		II 弱い働きかけ	(4) 自己顕示・承認を求める (5) 助力を求める (6) 注視
	III 身体的働きかけ	(6) 身体接触(抱きあげ・振り廻し等) (7) 身体に触れる		III 身体的働きかけ	(7) 身体接触を求める (8) 身体接触
	IV 物への働きかけ	(8) 物の注視 (9) 物への働きかけ (10) 物の使用		IV 物への働きかけ	(9) 物の注視 (10) 物への働きかけ (11) 物の使用
	V 感情表現	(11) 笑い		V 感情表現	(12) 笑い (13) 泣き
TAV	I 言葉での働きかけ	(1) 制止・禁止 (2) 指示	CAV	I 言葉での働きかけ	(1) 指示・命令 (2) 誘引 (3) 攻撃
	II 言葉での弱い働きかけ	(3) 助力・はげまし (4) Cの要求・感情の言語化 (5) 模倣		II 言葉での弱い働きかけ	(4) 自己顕示・承認を求める (5) 助力を求める
	III 問いかけ	(6) 話しかけ・問いかけ (7) 呼びかけ		III 問いかけ	(6) 話しかけ・問いかけ (7) 呼びかけ
TPB	I 従 属	(1) 従属	CPB	I 従 属	(1) 従属
	II 模 倣	(2) 模倣		II 模 倣	(2) 模倣
	III 態度での容認	(3) 態度での容認		III 拒 否	(3) 拒否
	IV 後 追 い	(4) 後追い		IV 応 答	(4) 応答
	V 拒 否	(5) 拒否		CPV	I 応 答
TPV	I 言葉での従属	(1) 従属	II 言葉での拒否		(2) 拒否
	II 言葉での容認	(2) 言葉での容認	CBB	特 異 行 動	(1) 常同行動
	III 応答・受容	(3) 応答・受容		CBV	特 異 言 語
	IV 言葉での拒否	(4) 拒否	Caa		
Tar		(absence of therapist's role)		CNB	
TNB		(評定不能=behavioral)	CNV		
TNV		(評定不能=verbal)			

すなわち、『C：「こんどはネー，大関」といって(から)容器に水をつぐ』は、『C：「こんどはネー，大関」という』と『C：容器に水をつぐ』との2つの unit に分割し、『C：「こんどはネー，大関」といいながら容器に水をつぐ』は 1 unit と考えたわけである。

5. 分析カテゴリー

次に分析のためのカテゴリーであるが、Coffey, H.S. & Wiener, L.L. (1967) および牛島他 (1970) の研究を参考に1つつ、われわれの治療経験と照して、Table 2 に示すようなカテゴリーを設定した。

すなわち、まずセラピストおよびクライアントの行動を active と passive との2つに大別し、さらにそれを behavioral と verbal とに分類し、治療者 (T) については、TAB, TAV, TPB, TPV (クライアントでは、CAB, CAV, CPB, CPV) の4つのカテゴリーを設定した。そして、その他に、クライアントの特異な行動に対して2つのカテゴリーと、セラピスト、クライアント双方に分類不能等の3つのカテゴリーを加え、セラピストの行動について7個の、クライアントの行動について9個のカテゴリーとしたわけである。

さらに、これらのカテゴリーを各々幾つかのサブカテゴリーに分割し、そのサブカテゴリー毎に数個の下位項目を設定した。したがって、セラピストの行動は最大30個の項目に分析され、クライアントの行動は最大35個の項目に分析されることになる。

なお、ここで用いた略号は、Tはセラピストを、Cはクライアントを、Aは active を、Pは passive を、Bは behavioral を、Vは verbal を、それぞれ表わしている。

また、ここでいう active とは、セラピスト (あるいはクライアント) が、active に人や物に働きかけていく、換言すれば、その行動の initiative をセラピスト (あるいはクライアント) がとる、ということの意味している。また、passive とは、セラピスト (あるいはクライアント) が他者から働きかけられて、passive に動く、換言すればその行動の initiative が相手によってとられていることを意味している。

以下、各カテゴリーおよびその項目についての定義と若干の補足例とを呈示する。

A. セラピストの行動の分析カテゴリー

(1) **TAB** —— ここでは、セラピストの行動の中、active で behavioral なものを扱う。

I 働きかけ —— 広い無味では、セラピストの行動はほとんど、クライアントに対する働きかけであるが、ここでは、その程度が特に強いものを指し、以下の2つの

項目によって定義されるものを含める。

(1) 制止・禁止：これは、クライアントの行動をセラピストが制止したり、禁止したりするものである。

〔例〕 T：(Cがプレイルームから出ようとするのを) 通せんぼする

T：(Cが泥水を飲もうとする) コップを取り上げる

(2) 指示・働きかけ：これは、クライアントに対し、セラピストが指示を与えたり、強力に働きかけていくものである。

〔例〕 T：カップをCの頭にのせ、トントンと叩く

T：(Cが使うように) ボール箱を示す

II 弱い働きかけ —— ここには、I に比して弱いと考えられるセラピストの働きかけを含める。

(3) 助力：これは、セラピストがクライアントの行動を援助しているものである。ただし、クライアントからの要求 (例：「先生、これやってよ」) があってはならない。

〔例〕 T：(Cがボール箱に入ろうとするのを) 手伝う

T：クライアントと一緒に机を運ぶ

(4) 模倣：これは、セラピストがクライアントとかわりを持つために、non-communicable なクライアントの行動を積極的にとり入れ模倣するものである。

〔例〕 T：(Cが常同的にやるので) 本をバラバラめくってみせる

T：(Cの1人遊びを模倣して) コップを頭に被る

(5) 注視：これは、セラピストが active にかかわるために、クライアントの行動を見守っているものである。

III 身体的働きかけ —— ここには、セラピストがクライアントの身体に直接接触することによって働きかけているものを含める。ただし、副次的にクライアントの身体に触れているものについては、ここではとり扱わず、後述するように、評定シートの所定欄に+印を記して区別した。

(6) 身体接触(抱きあげ、振り廻し等)：これは、セラピストがクライアントを抱きあげ、いわゆる“高い高い”をしたり、抱いて振り廻したりする行動のように、身体接触に動きが伴ったものである。

(7) 身体に触れる：これは、前項以外の、クライアントの頭をなでたりする行動のように、単に身体に触れるのみのものである。

IV 物への働きかけ——ここには、セラピストがクライアントにはかかわらず、物へと働きかけているものを含める。

(8) 物の注視：これは、セラピストが物に手を触れることもなく、それを見つめているものである。

(9) 物への働きかけ：これは、セラピストが物に接近し、あるいは接触しているものである。

〔例〕 T：滑り台に近づく

T：オモチャ箱を物色している

(10) 物の使用：これは、セラピストが物に働きかけそれを使用しているものである。

〔例〕 T：滑り台を直す

T：電気機関車をいじっている

V 感情表現——ここには、セラピストの感情表現を含める。ただし、VTRの精度等から勘案して、実際には、次の1項のみにとどめた。

(1) 笑い

(2) **TAV**——ここでは、セラピストの行動中、**active** で **verbal** なものを扱う。

I 言葉での働きかけ——ここには、**TABI**と同様に、セラピストの言語的な働きかけの程度の強いものを含め、具体的には次の2項目に分類する。

(1) 制止・禁止：これは、セラピストのクライアントに対する言語的な制止・禁止である

〔例〕 T：「それを飲んじゃダメッ」

(2) 指示：これは、セラピストのクライアントに対する言語的な指示である。

〔例〕 T：「○○ちゃん、これつないで」

II 言葉での弱い働きかけ——ここには、**TABII**と同様に、セラピストの言語的な働きかけの程度が比較的弱いと考えられるものを含める。

(3) 助力・励げまし：これは、クライアントの行動を言語的に援助し、激励しているものである。

〔例〕 T：（Cと一緒にボール箱を運びながら）

「ヨイショ、ヨイショ」

T：「○○ちゃん、もうちょっとだよ。がんばって」

(4) クライアントの要求・感情の言語化：これは、クライアントの要求や感情をセラピストが言語で表現してやるものである。

〔例〕 T：「○○ちゃん、滑っちゃったね、おも

しろかったねー」

T：「ダッコして欲しいのネ」

(5) 模倣：これは**TAB(4)**に相当する言語行動である。

〔例〕 T：（Cが機械的にいうのをまねて）「トーラックー」

III 問いかけ——ここには、セラピストがクライアントに対して、言語によって、問いかけたり、呼びかけたりするものを含める。

(6) 話しかけ・問いかけ：これは、セラピストがクライアントに話しかけ、あるいは問いかけるものである。

〔例〕 T：「こんどは、何つくろうかな」

T：「○○ちゃん、この前どこ行ってきたの」

(7) 呼びかけ：これは、セラピストがクライアントの注意や関心をひくために、その名前を呼びかけているものである。

(3) **TPB**——ここでは、セラピストの行動中、**passive** で **behavioral** なものを扱う。

I 従属——ここには、クライアントの要求にしたがって、セラピストが動いている行動を含める。ただし、以下のカテゴリーに含まれるものは、このカテゴリーに含めない。

〔例〕 T：（Cがさし出したコップをとって）コップを頭に被る

II 模倣——これは、クライアントの要求にしたがって、セラピストがクライアントの行動を模倣するものである。したがって、**TABII**の模倣とは異って、クライアントとの関係が **communicable** なものであるときに限られる。

III 態度での容認——ここにはセラピストがクライアントの行動に対して、態度で容認を示すものを含める。

〔例〕 T：うなづく

T：（Cが滑り台から滑るのを）下で待ちかまえる

IV 後追い——これは、クライアントの行動が一旦途切れ、別の行動へと移るために室内を移動するのに対して、その後を追う行動を指す。

V 拒否——これは、クライアントから働きかけられたものを、セラピストが拒否する行動を指す。

〔例〕 T：（Cがさし出した水を）飲まないで捨てる

T：（Cがよりかかってきたのを）身をよける

(4) **TPV**——ここでは、セラピストの passive で verbal な行動を扱う。

I 従属——これは、TPBIに相当する言語行動を指す。

〔例〕T：(Cに「ダメといって」と言われて)
「ダメーッ」

II 言語での容認——これは、TPBIIに相当する言語行動を指す。

〔例〕T：「滑ってもいいよ、〇〇ちゃん」

III 応答・受容——クライアントとの関係を保つために、クライアントの verbal な働きかけを受容し、つないでゆこうとするものをここに含める。

〔例〕T：(Cから「こんどはネー、白雪」と言われて)「こんどはネー、白雪」

T：(Cから「せんせ、お家帰る」と尋ねられて)「ウン、帰るよ」(再びC：「どこのお家」)「名大のネー、そばのお家だよ」

IV 拒否——これは、TPBVIに相当する言語行動を指す。

〔例〕T：(Cのさし出した水に対して)「イヤッ、汚いから」

T：(Cのオンプの要求に対して)「オンプはダメ」

(5) その他の行動

Tar：これには、セラピストがボンヤリとよそ見をしていたり、傍観していたりして、セラピストとしての役割をはたしていないと考えられるものを含める。

TNB・TNV：この2つのカテゴリーには、以上に述べてきたカテゴリーには含めることのできないセラピストの行動を含め、behavioralなものをTNB、verbalなものをTNVとした。

B. クライアントの行動の分析カテゴリー

(1) **CAB**——ここでは、クライアントの行動の中、active で behavioral なものを扱う。

I 働きかけ——ここには、TAB Iと同様に、クライアントの働きかけの中、その程度が比較的強いと考えられるものを含める。

(1) 指示・働きかけ・命令：これは、TAB(2)に相当するクライアントの行動である。

〔例〕C：Tにケン玉を持たせる

(2) 誘引：これは、クライアントが他者を自分の遊びに引き入れる行動である。

〔例〕C：Tの白衣をひっぱってボール箱の所へ連れて行く

(3) 攻撃：これは、クライエントによる攻撃行動である。ただし、人に対するもののみを扱い、物に対する攻撃はここには含めない。

〔例〕C：Tに積木を投げつける

II 弱い働きかけ——ここには、TAB IIと同様にクライアントの働きかけの程度が比較的弱いと考えられるものを含める。

(4) 自己顕示・承認を求める：これは、クライアントがわざといたずらをしたり、セラピストをついたりして、関心を買ひ、あるいは、自己の存在を承認させるようなものである。

〔例〕C：Tをつついて、サーッと逃げる

(5) 助力を求める：これは、クライアントが行動によってセラピストの援助を求めるものである。

〔例〕C：Tの手をとってドアを開けさせようとする

(6) 注視：これは、TAB(5)に相当するクライアントの行動である。

III 身体的働きかけ——ここには、クライアントによる身体接触やその要求を含める。

(7) 身体接触を求める：これは、クライアントが行動によって身体接触を要求するものである。

〔例〕C：Tにおぼれかかる

(8) 身体に触れる：これは、前項目とは異なり、単にセラピストの身体に触れたり、身をすり寄せたりするクライアントの行動である。

IV 物への働きかけ——ここには、TAB IVと同様に、クライアントが他者にかかわろうとせず、物へと働きかけているものを含める。

(9) 物の注視：これは、TAB(8)に相当するクライアントの行動である。

(10) 物への働きかけ：これは、TAB(9)に相当するクライアントの行動である。

(11) 物の使用：これは、TAB(10)に相当するクライアントの行動である。

V 感情表現——ここには、クライアントの感情表現を含めるが、VTRの精度の問題もあり、次の2つにとどめた。

(12) 笑い

(13) 泣き

VI 無目的的行動——ここには、クライアントの一連の行動が一旦途切れて、室内をウロウロしたり、衝動的に遊びを変化させるものを含める。なお、下位項目は次の1つのみである。

(14) 室内移動

(2) **CAV**——ここでは、クライアントの行動の中、**active** で **verbal** なものを扱う。

I 言葉での働きかけ——ここには、**TAV I**と同様に、クライアントの言語による働きかけの程度の比較的強いものを含める。

(1) 指示・命令：これは、**CAB(1)**に相当する言語行動である。

〔例〕C：「先生、向うもってて」

(2) 誘引：これは、**CAB(2)**に相当する言語行動である。

〔例〕C：「先生、こっちで遊ぼうよ」

(3) 攻撃：これは、**CAB(3)**に相当する言語行動である。

〔例〕C：「バカヤロー、お前なんか死んじゃえ」

II 言葉での弱い働きかけ——ここには、**TAV II**と同様に、クライアントの言語による働きかけの程度の比較的弱いものを含める。

(4) 自己顕示・承認を求める：これは、**CAB(4)**に相当する言語行動である。

〔例〕C：「〇子もやる」

C：「〇〇先生、ハゲ先生」

(5) 助力を求める：これは、**CAB(5)**に相当する言語行動である。

〔例〕C：「アテテ（開けて）」

III 問いかけ——ここには、**TAV III**と同様に、クライアントによる、問いかけ、話しかけを含める。

(6) 話しかけ・問いかけ：これは、**TAB(6)**に相当するクライアントの言語行動である。

(7) 呼びかけ：これは、**TAB(7)**に相当するクライアントの言語行動である。

IV 身体接触の要求——ここには、言語によるクライアントの身体接触の要求を含める。なお、下位項目は次の1項目のみである。

(8) 身体接触の要求

〔例〕C：「オブ、オブ（おんぶ）」

C：（Tが“高い高い”をするとき常にいうので）「ヨイショ」

(3) **CPB**——ここでは、クライアントの行動の中、**passive** で **behavioral** なものを扱う。

I 従属——これは、**TPB I**に相当するクライアントの行動である。

II 模倣——ここには、セラピストの行動を見て、それを模倣するクライアントの行動が含まれる。

III 拒否——これは、**TPB V**に相当するクライエン

トの行動である。

IV 応答——ここには、セラピストからの問いかけ、話しかけに対して、応答し、その関係を保っているものを含める。

〔例〕C：（Tからの問いかけに対して）うなずく

(4) **CPV**——ここでは、クライアントの行動の中、**passive** で **verbal** なものを扱う。

I 応答——これは、**CPB IV**に相当する言語行動である。

II 拒否——これは、**CPB III**に相当する言語行動である。

(5) **特異行動**——**CBB**, **CBV(1)**, **CBV(2)**, **CBV(3)**：ここでは、クライアントの特異な行動を扱い、常同行動を**CBB**、独語を**CBV(1)**、奇声を**CBV(2)**、**echolalia**を**CBV(3)**に含める。

(6) **その他の行動**——**Caa**：これは、クライアントがボンヤリしている等、行動らしいものが見られないものを指す。

CNB・CNV：これは、**TNB**, **TNV**とそれぞれ同義である。

6. 評定者

名古屋大学臨床心理相談室のスタッフ8名が本研究の**VTR**評定者となった。これらの評定者はすべて心理学関係学科を卒業し、同相談室において0.5～7年の臨床経験をもつものである。

7. VTR評定の方法

前項に述べた8名の評定者が、2名ずつの組になり、所定のカテゴリーにしたがって、サンプル**VTR**の個々の**Unit**について評定分類した。実際には**Table 3**に示すような組合せにしたがって、ある事例の治療担当は、そ

Table 3 分析担当の組合せ

延回数 事例名	1	2	3	4	5	6	7
鈴○	小沢 蔭山	小沢 蔭山	小沢 蔭山	佐藤 蔭山	佐藤 蔭山	佐藤 沼尾	佐藤 沼尾
高○	神野 園田	神野 園田	神野 園田	神野 園田	神野 沼尾	小沢 沼尾	
大○	加藤 生越	加藤 生越	加藤 生越	加藤 生越	加藤 生越		

治療担当者 鈴○……神野（須賀）*
高○……加藤
大○……神野

* 須賀は1969年3月～1971年3月の間、治療を担当した。

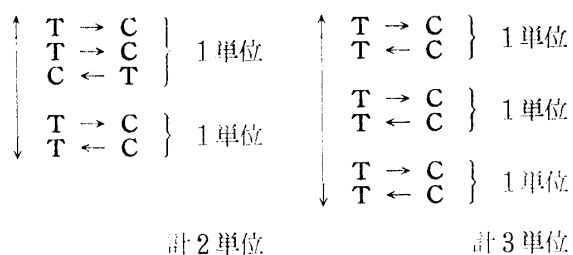


Fig. 1 TとCとのcommunication単位

の事例の分析には参加しないようにした。

この時、原則的には、1 unit に1 カテゴリーを当てたが、4の(2)の分析単位 (unit) の項に挙げた例のように、behavioral な行動と verbal な行動とが同時に生じており、双方をもって1 unit と考えられる時のみ、blend としてスコアすることにした。

また、前述のカテゴリーの他に、セラピストの人にかかわるもの (すなわち、TAB I~III, TAV I~III) については、クライアントに対して、身体接触を伴って働きかけているのか否か、あるいは、物を介して働きかけているのか否か、が重要な治療的ニュアンスを持つであろうと考えられたため、それぞれ分析シートの所定欄に+印を付して記録した。

また、クライアントとセラピストとの overt な communication のあり方をとらえるために、個々の Unit について、働きかけの方向を矢印で示した。すなわち、TからCへ active に働きかけたものについては、T→C、Cから働きかけられて passive にTが動いたものはC→T (クライアントの場合には、C→T、T→Cと

なる)の符号を付したわけである。

さらに、この communication がどの程続くのかを、サンプルの unit 番号の脇に↓印を付して記録した。(なお、これは、全く overt な communication にのみ関して評定するものであり、いわゆる心理療法のつながりとは趣を異にしている)そして、この↓印の内に含まれるT→CまたはC→Tを原則として communication の1単位としてカウントした。ただし、Fig. 1に示すように、T→C (あるいはC→T) が数個に亘って生じ、その後、C→T (あるいはT→C) が生じている場合にも、それらが一連の↓で示される unit のつながりの中で生じている場合には、同様に1単位としてカウントした。

なお、実際には、評定者は次の3つのステップを踏み、上述の評定を行なった。

(1) 文字面からの分析——分析カテゴリーに慣れること、および、個々のサンプルでの分析における問題点を把握し、全体の場に戻すことを目的として逐語的記録の文字面をてがかりに上述の評定を行なった。

(2) 各評定者単独によるVTR分析——文字面だけに頼るバイアスを防ぐために、各評定者が単独にVTRを見、再度、文字にとらわれない分析を試みた。

(3) 評定者間の分析の調整——こうしてでき上った分析結果を、前述した2人組の評定者がもちより、VTRを再度再生することにより、不一致点について協議し、統一的評定を決定した。

なお、評定の実例は Table. 4 に示してある。

(佐藤勝利)

Table 4 評定の実例

つ な が り	Therapist								Client													
	No.	Com.	TA		TP		Tar	TN		No.	Com.	CA		CP	Caa	CN		CB		身 体		
			B	V	B	V		B	V			B	V			B	V	B	V			
↓ ↑	31	T→C	5																		+	
	32	C→T				3																
	33									33	10											
	34	T→C		6																		
	35	T→C	2	3																		++
	36										36	T→C		1								

IV 結 果

前述の分析カテゴリーにもとづいて、分析した結果にもとづいて、事例ごとに、項目別の検討を行なったが、以下若干の考察を加えながら記述する。

なお、表示、図示については、事例ごとに、頭文字に数字を入れることにした。

1. 事例「鈴〇〇〇美」の結果

本事例の場合、手続の所でも述べたがサンプルの抽出時間が各期すべてが10分にならなかったため、以下の分析の際に頻数を問題にする場合は10分間のサンプルにする為に換算をし、その修正頻数によって検討した。

(1) T (therapist) 側の分析

① Tの動きの全体的分析—— Fig. S-1は各期とも10分の頻数に修正した総サンプル数と therapist (以下T) のサンプル数を示したものである。Tのユニット数は期が進むに従って増加していき、第1-A期と第4-B期を比較すると1.93倍となっている。つまりTの動き(必ずしも client [以下C] への働きかけと同義ではない)が期が進むにしたがって増加していき、第4-B期では第1-A期と比較して約2倍の動きが見られる。さらに同一期においては次の期に近い時点の方が必ず多いTの動きが見られている。同時に第1

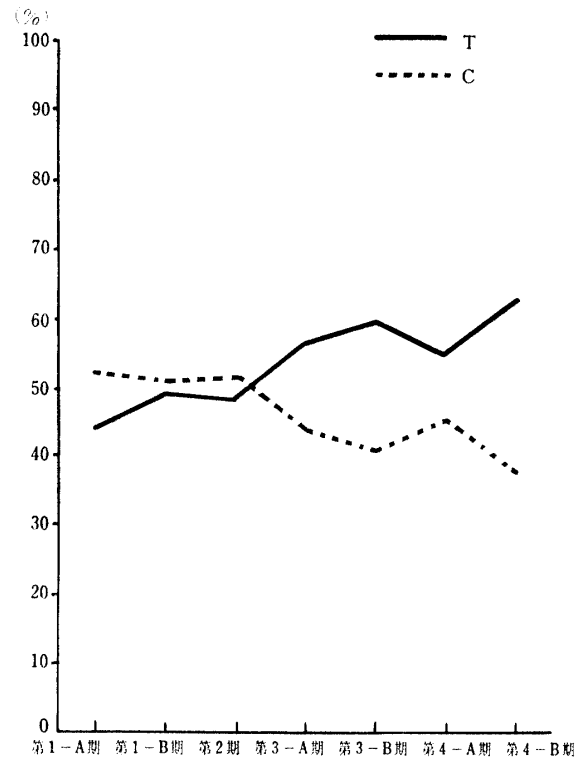


Fig. S-2 総サンプル数に対するT, Cのしめる百分率

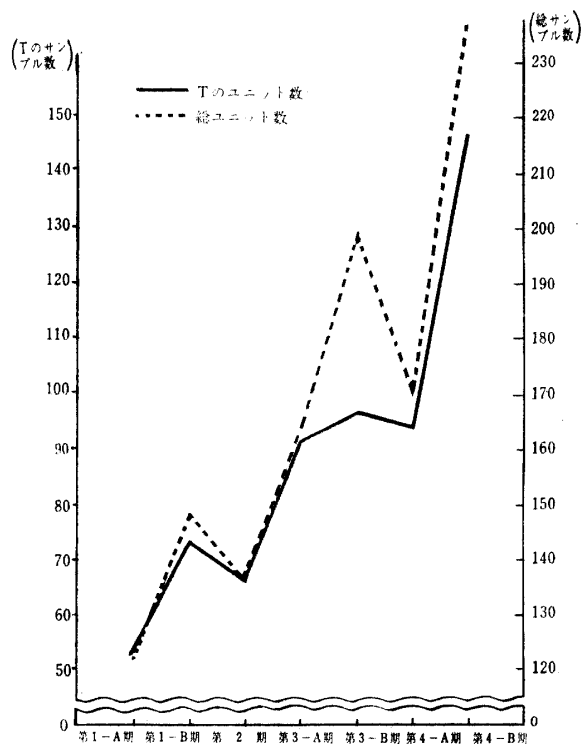


Fig. S-1 Tの修正サンプル数と総サンプル数

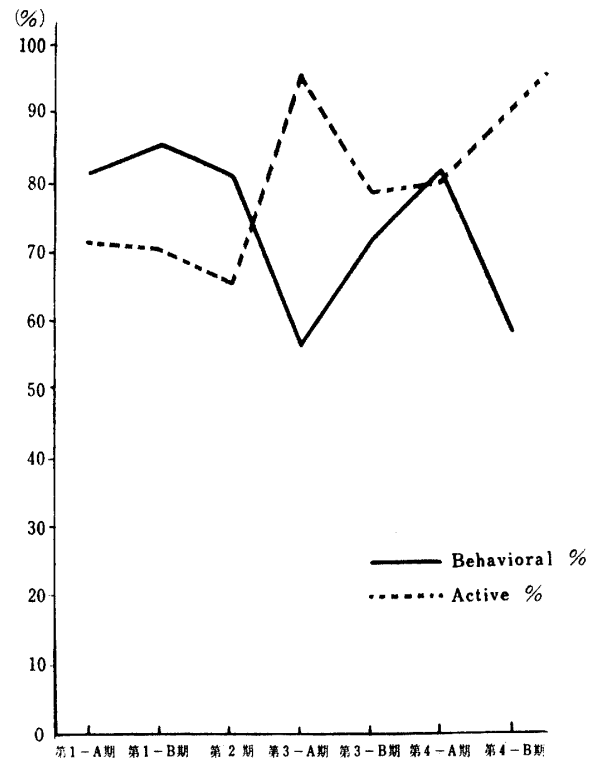


Fig. S-3 Tのbehavioralの百分率とactiveの百分率

自閉症に関する研究

Table S-1 T の active^{*1} と passive^{*2} の頻数とその百分率 (ブレンドを含む)

期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
active	$\frac{34}{37}$ (70.8)	$\frac{40}{52}$ (50.2)	$\frac{32}{40}$ (65.3)	$\frac{84}{95.4}$ (95.4)	$\frac{62}{74}$ (78.5)	$\frac{59}{74}$ (80.0)	$\frac{135}{96.5}$ (96.5)
passive	$\frac{14}{15}$ (29.2)	$\frac{17}{21}$ (29.8)	$\frac{17}{21}$ (34.7)	$\frac{3}{4.6}$ (4.6)	$\frac{17}{20}$ (21.5)	$\frac{14}{18}$ (19.2)	$\frac{5}{3.5}$ (3.5)

*1 ; TAB+TAV, *2 ; TPB+TPV
() 内百分率, 下段は修正頻数

Table S-2 T の behavioral と verbal の頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
behavioral	$\frac{39}{45}$ (82.9)	$\frac{42}{52}$ (85.7)	$\frac{37}{46}$ (82.2)	$\frac{47}{56.0}$ (56.0)	$\frac{56}{66}$ (72.6)	$\frac{57}{69}$ (82.6)	$\frac{74}{58.3}$ (58.3)
verbal	$\frac{9}{10}$ (17.1)	$\frac{7}{9}$ (14.3)	$\frac{8}{10}$ (17.8)	$\frac{37}{44.0}$ (44.0)	$\frac{21}{25}$ (27.4)	$\frac{12}{15}$ (17.4)	$\frac{53}{41.7}$ (41.7)

() 内百分率, 下段は修正頻数

1-B期よりも第2期の方が、第3-B期よりも第4-A期の方がすくなく、直前の期の後の時点よりも動きがすくなくない。

次にTのサンプル数と総サンプル数の変化の関係をみていくと、ほぼ同じような変化を示していることがわかる。総サンプル数の増加も第1-A期と第4-B期では2.08倍となっている。つまりTのサンプル数の増加とほぼ同じ率での増加が見られている。TとCの占める比率においては Fig. S-2 に示されるように、第2期まではTとCとほぼ同サンプル数を総サンプルの内でもめて

おり、第3期以降はTの方がわずかであるが多くを占めている。

② Tの動きにおける active-passive, behavioral-verbal について—— Table S-1 は T の active-

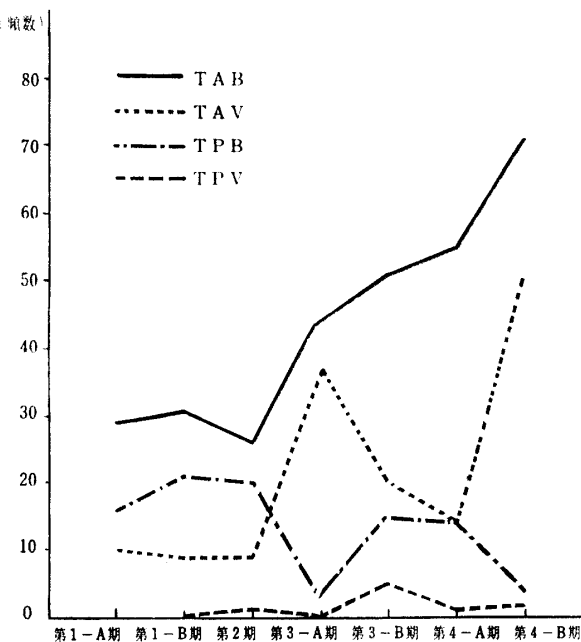


Fig. S-4 Tの категорияにおける修正頻数

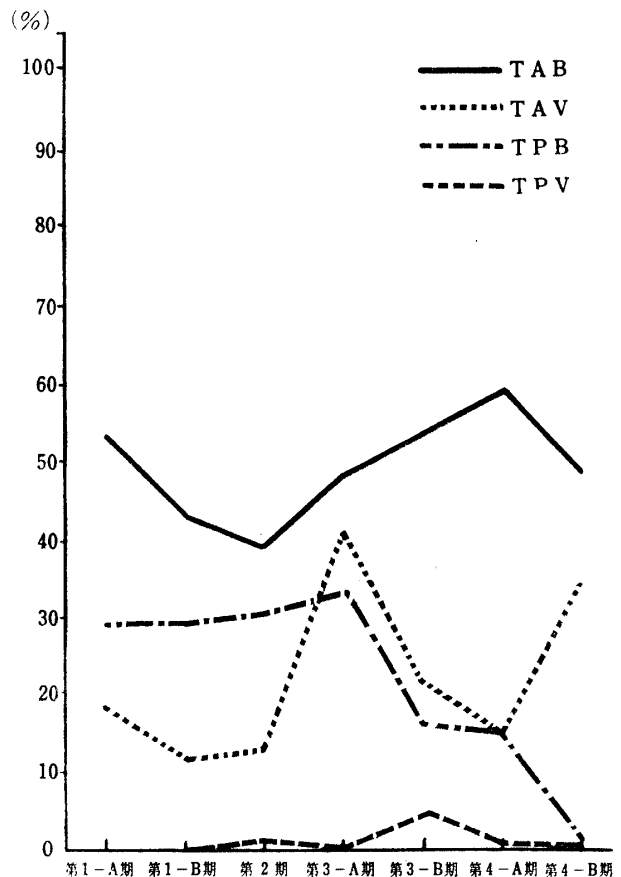


Fig. S-5 Tの категорияにおける百分率

Table S—3

Tの категорияにおける修正頻数

期 カテゴリー	第1—A期	第1—B期	第2期	第3—A期*	第3—B期	第4—A期	第4—B期*
T A B	29	31	26	44	51	55	71
T A V	10	9	9	37	20	14	51
T P B	16	21	20	3	15	14	3
T P V	0	0	1	0	5	1	2
Tのサンプル数	53	73	66	91	97	94	147

*の期は修正の必要が無いため元頻数のままである。

passive に関して示すものである。ここでの active とは、カテゴリーにおける active-behavioral roles of therapist (以下TAB) と ative-verbal roles of therapist (以下TAV) とそのブレンドとの総和を意味する。passive とは同様に TPBとTPVとそのブレンドの総和を意味する。Table S—1 を図示したものが Fig. S—3 である。Tの動きの内イニシアティブをとるような active な動きがすべての期において優先しており、最も低い第2期においても65.3%を占めている。第3—A期と第4—B期では95%を占めていることがわかる。第1期と第2期は同じ比率で70%前後の active な動きであり、それ以降はすべて80%以上が active な動きであり、第2期を境にしてTの動きの変化、つまりイニシアティブをとる動きがTの動きのほとんどを占めていることがわかる。

次に behavioral と verbal との関係については Table S—2 と Fig. S—3 に示してある。ここでの behavioral とはTABとTPBの和であり、verbal とはTAVとTPVの和である。第3—A期と第4—B期は behavioral が55%強であり、verbal とほぼ同率での

動きであることがわかる。しかし他の期は behavioral が80%以上を占めており圧倒的に behavioral な動きをTがしていることがわかる。

要約すると、第3—A期と第4—B期はTABとTAVがほぼ同程度の比率で占められており passive な動きがほとんど無い期であり、他の第1期、第2期、第3—B期、第4—A期はほとんどがTABの動きの期として見ることができるであろう。その内においても第1期、第2期と第3—B期、第4—B期とは active の程度において10%ちがい、第1期、第2期においては passive の含まれる程度のちがいが両者の間に見られる。

③ Tの категорияに関して——前項の②においてカテゴリーを active-passive, behavioral-verbal の視点でまとめて検討したが、ここではTAB, TAV, TPB, TPVの各カテゴリーについて検討する。Table S—3は各カテゴリーの頻数を、Fig. S—4はそれを図示したものである。Fig. S—5は百分率を図示したものである。前項②において検討された点は Fig. S—5で明確になっており、残された点の第1期、第2期と第3—B期と第4—B期のちがいはTPBの占める比率

Table S—4

TABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

期 サブカテゴリー	第1—A期	第1—B期	第2期	第3—A期	第3—B期	第4—A期	第4—B期
I 働きかけ	11(42.3)	8(32.0)	13(61.8)	6(13.6)	24(55.8)	12(27.3)	12(16.9)
II 弱い働きかけ	10(38.5)	9(36.0)	7(33.3)	3(6.8)	10(23.3)	23(52.3)	25(35.2)
III 身体的働きかけ	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.3)	5(11.4)	23(32.4)
	1(3.8)	2(8.0)	0(0.0)	4(9.1)	1(2.3)	0(0.0)	5(7.2)
IV 物への働きかけ	3(15.4)	6(24.0)	1(4.8)	31(70.5)	7(16.3)	4(9.1)	6(8.5)
V 感情表現	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
Total	25(53.1)*	25(43.1)*	21(39.6)*	44(48.4)*	43(53.8)*	44(59.5)*	71(48.3)*
Tのサンプル数	48	58	53	91	80	75	147

* ; Tのサンプル数に対する百分率, () 内百分率

Table S-5 TAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー \ 期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
I 言葉での働きかけ	2(22.2)	0(0.0)	4(57.1)	4(10.8)	5(29.4)	0(0.0)	13(25.5)
II 言葉での弱い働きかけ	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(11.9)	9(81.8)	6(11.7)
III 問いかけ	7(77.8)	7(100.0)	3(42.9)	33(89.2)	10(58.8)	2(18.2)	32(62.7)
Total	9(18.4)*	7(12.0)*	7(13.2)*	37(40.7)*	17(21.3)*	11(14.9)*	51(34.7)*
Tのサンプル数	48	58	53	91	80	75	147

* ; Tのサンプル数に対する百分率, () 内百分率

の差によることが明らかにされている。またTPVはほとんど見られず、passiveの面ではTPBの動きであり、Tの動きの中でTPBが第1期から第3-A期まで同程度の30%前後を占めているが第3-B期から急激に減少し、第4-B期では0に近い。頻数において、TABは第1-A期と第4-B期では2.5倍の増加が見られ、TAVでは第3-A期は第1期、第2期に比較して3.5倍、第4-B期では5倍と増加している。TPVはほとんど無く、従って変化も無い。

④ Tのサブカテゴリーに関して——Table S-4とFig. S-6はTABに関して、Table S-5とFig. S-7はTAVに関して、Table S-6とFig. S-8はTPBに関して、Table S-7はTPVに関してのサブカテゴリーによるTableとFigureである。各期において最も多くを占めているTABに関して見て

いくと、その構成のあり方として2つの群に分けられる。つまり第1期、第2期、第3-B期、第4-A期の群と第3-A期と第4-B期の群である。前者は同時に②、③の所で述べたようにTのカテゴリーにおいてTABが大部分を占める群であり、後者はTABとTAVが同程度の群である。前者はTABの70~80%近くまでサブカテゴリーの「I働きかけ」と「II弱い働きかけ」つまり『働きかけ』によって大部分が占められており、それにわずかに「IV物への働きかけ」と「III身体的働きかけ」が加わっている構成を示す。後者の群は前者と全く異なる構成の点では共通しているが内容的には全く異っており、第3-A期は70%が「IV物への働きかけ」でありI、II、IIIも存在するが同程度でありわずかである。第4-B期はIとIIを合わせた『働きかけ』が50%を占め、40%が「III身体的働きかけ」になっており「IV物へ

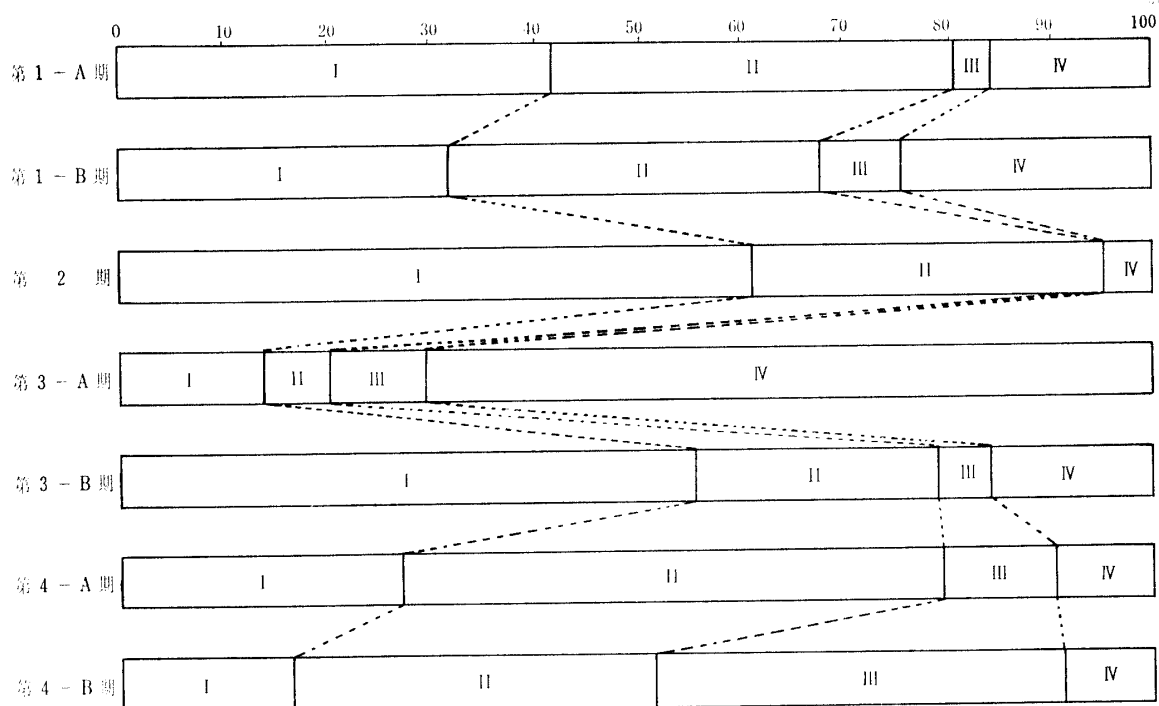


Fig. S-6 TABのサブカテゴリーにおける百分率

原 著

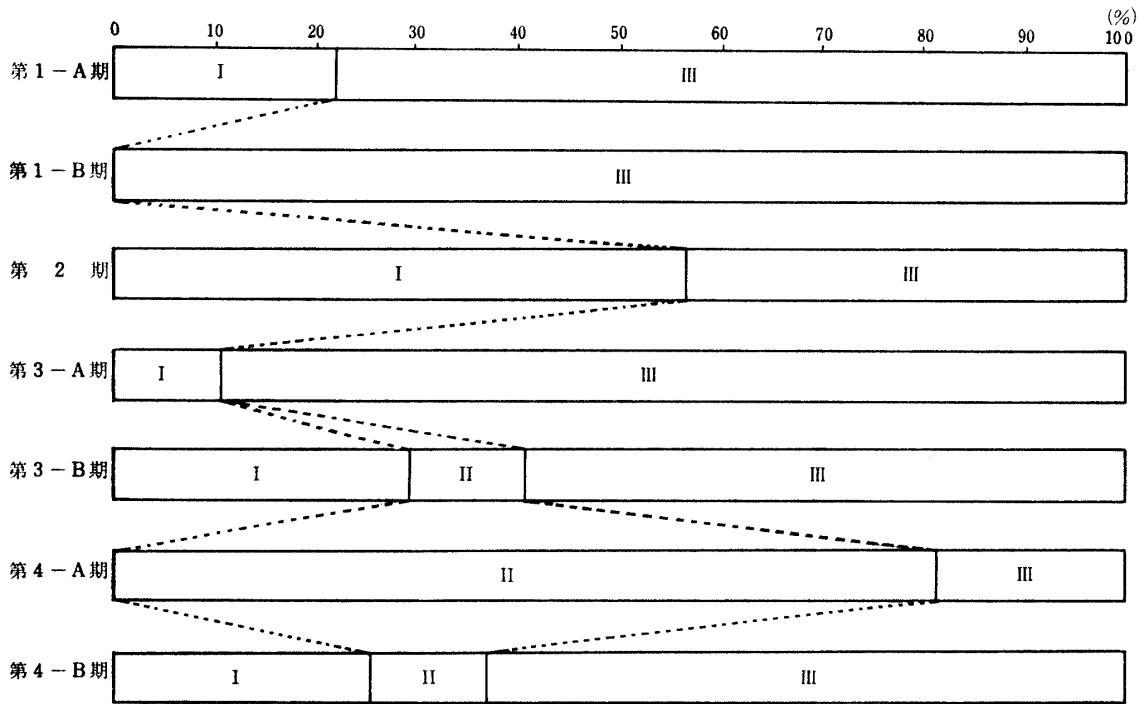


Fig. S-7 TAVのサブカテゴリーにおける百分率

Table S-6 TPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
I 従属		3(21.4)	4(23.5)	4(25.0)	0(0.0)	2(15.4)	3(23.1)	0(0.0)
II 模倣		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
III 態度での容認		2(14.3)	6(35.3)	4(25.0)	0(0.0)	7(53.8)	3(23.1)	0(0.0)
IV 後追い		9(64.3)	7(41.2)	5(50.0)	2(66.6)	4(30.8)	7(53.9)	3(100.0)
V 拒否		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
Total		14(28.6)*	17(29.0)*	16(30.2)*	3(33.5)*	13(16.3)*	13(14.9)*	3(2.0)*
Tのサンプル数		48	58	53	91	80	75	147

* ; Tのサンプル数に対する百分率, ()内百分率

Table S-7 TPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
I 言葉での従属		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(25.0)	0(0.0)	0(0.0)
II 言葉での容認		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(50.0)
III 応答・受容		0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	3(75.0)	1(100.0)	1(50.0)
IV 言葉での拒否		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
Total		0(0.0)*	0(0.0)*	1(1.9)*	0(0.0)*	4(5.0)*	1(1.4)*	2(1.4)*
Tのサンプル数		48	51	53	91	80	75	147

* ; Tのサンプル数に対する百分率, ()内百分率

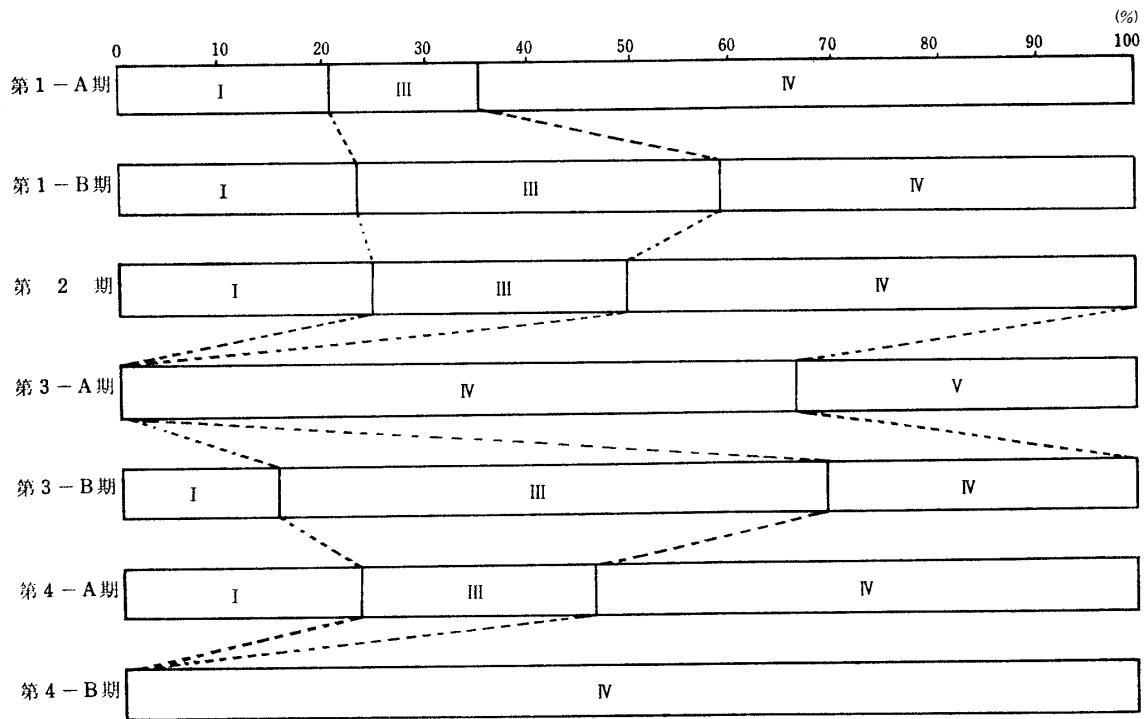


Fig. S-8 TPBのサブカテゴリーにおける百分率

の働きかけ」は10%とわずかである。前者の群内においても第2期のみ他の期と異っており『働きかけ』が95.1%を占めており、また「Ⅲ身体的働きかけ」が全く無い点で他のすべての期と異なる点である。

TAVに関しては、「Ⅲ問いかけ」に視点をあてて見ると、Ⅲが大部分(80~100%)の期が第1-A期、第1-B期、第3-A期があり、Ⅲが60%程度の期が第3-Bと第4-B期である。Ⅲが50%の期が第2期、Ⅲが20%のものが第4-A期である。最もⅢの多い期群のうち第1-B期はⅢのみであり、他の期はわずかではあるが「Ⅰ言葉による働きかけ」が見られている。Ⅲが60%程度占めている次のⅢが60%の期群は30%がⅠを占めて残り10%が「Ⅱ言葉による弱い働きかけ」となっている。Ⅲが50%の期群では残りの50%はⅠとなっている。Ⅲのほとんど無い第4-A期はⅡが80%を占めている。

②, ③の項でTABとTAVがTの動きで半々を占めている第3-A期、第4-B期と他の期との相異はTAVの構成のあり方に特別見られなかった。

TPBに関しては頻数的に見て第3-A期と第4-B期はほとんど見られないので分析から除き、他の期に対して検討すると、すべての期に「Ⅱ模倣」は全く見られていない。そして「Ⅰ従属」が各期とも一定して15~20%の間を占めており、残りの80%を「Ⅲ態度での容認」と「Ⅳ後追い」で分けている。Ⅳは第1-B期と第3-B期が最もすくなく30~40%である。第1-A期と第4

第1-A期が55~65%と最も多く、第2期が前二者の中間にありⅣが50%を占めている。大きく見て極端な構成の変化は見られない。

TPVは頻数がすくないのでTableをのせておくのみとする。

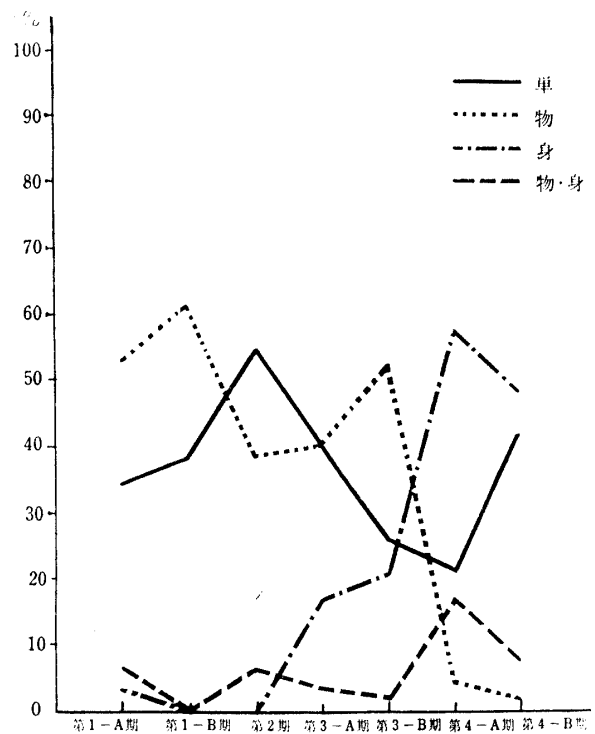


Fig. S-9 TのCに対する働きかけ方 (ブレンドを含む)の百分率

Table S-8 TのCに対する働きかけ方の頻数とその百分率 (ブレンドを含む)

働きかけ方 \ 期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
単	11(35.5)	13(38.2)	17(54.8)	21(39.6)	14(25.9)	10(21.3)	48(41.4)
物	17(54.8)	21(61.8)	12(38.7)	22(40.4)	28(51.9)	2(4.3)	3(2.3)
身 体	1(3.0)	0(0.0)	0(0.0)	9(17.0)	11(20.4)	27(57.4)	56(48.1)
物・身 体	2(6.5)	0(0.0)	2(6.5)	1(3.0)	1(1.8)	8(17.0)	9(7.8)

() 内 百分率

Table S-9 behavioral なTのCに対する働きかけ方の頻数とその百分率

働きかけ方 \ 期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
単	6(26.4)	6(31.6)	11(55.0)	2(15.4)	6(16.7)	7(20.0)	25(44.6)
物	13(61.9)	13(68.4)	8(40.0)	5(38.5)	21(58.3)	2(5.7)	1(1.8)
身 体	1(4.8)	0(0.0)	0(0.0)	5(38.5)	8(22.2)	20(57.1)	27(48.2)
物・身 体	2(9.5)	0(0.0)	1(5.0)	1(7.5)	1(2.8)	6(17.1)	3(5.4)

() 内 百分率

Table S-10 verbal なTのCに対する働きかけ方の頻数とその百分率

働きかけ方 \ 期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
単	5(55.6)	6(85.7)	6(85.7)	19(51.3)	8(47.1)	3(25.0)	23(45.1)
物	4(44.4)	1(14.3)	0(0.0)	14(37.8)	7(41.2)	0(0.0)	2(3.9)
身 体	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(10.9)	2(11.8)	7(58.3)	20(39.2)
物・身 体	0(0.0)	0(0.0)	1(14.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(16.7)	6(11.8)

() 内 百分率

⑤ TのCに対する働きかけ方の分析——Table S-8はTのCに対する働きかけ、つまりT→Cの印のつけられる active なカテゴリーにおいて、その働きかけ方として、1) 単独な働きかけ方、2) 物を介しての働きかけ方、3) 身体を介しての働きかけ方、4) 物と身体の両方を介しての働きかけ方、の4つに分類し、その頻数と百分率を表示したものである。Fig. S-9は百分率を図示したものである。Table S-9とFig. S-10は behavioral な働きかけ方に関して、Table S-10とFig. S-11は verbal な働きかけ方に関して示すものである。その結果から各期を働きかけ方で命名するとTable S-11のようになる。behavioral と verbal を合わせたものを見ると第3期は物を介しての時期、第2期と第3期は単独の時期、第4期は身体を介しての時期と見ることができる。behavioral は基本的には behavioral と verbal を合わせたものと同傾向を示しているが、第3期のみがすこし異なり、物と身体

を介した働きかけの期であり次の第4期に移る前の身体的働きかけの芽がこの期に出てきている。verbal のみに見ていくと、第1期と第2期は単独の働きかけの時期であり、第3期は単独と物を介した時期、第4期

Table S-11 TのCに対する働きかけ方

働きかけ方 \ 期	behavioral	verbal	behavioral + verbal
第1-A期	物—単	単—物	物—単
第1-B期	物—単	単	物—単
第2期	単—物	単	単—物
第3-A期	物・身体	単—物	単・物
第3-B期	物—身体	単・物	物—単
第4-A期	身 体	身 体	身 体
第4-B期	身体・単	単・身体	身体・単

・印はほぼ同率の重みを持っているもの。
—印の前が優勢のもの、後が劣勢ではあるが支配的なもの。

自閉症に関する研究

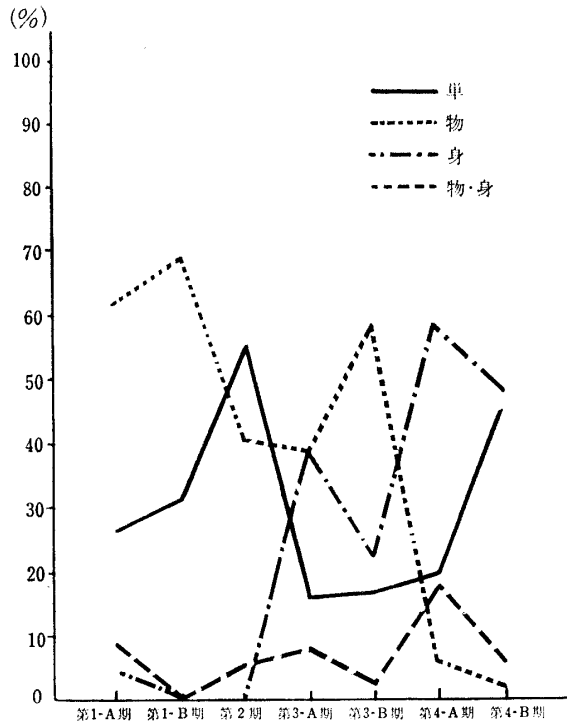


Fig. S-10 behavioral なTのCに対する働きかけ方の百分率

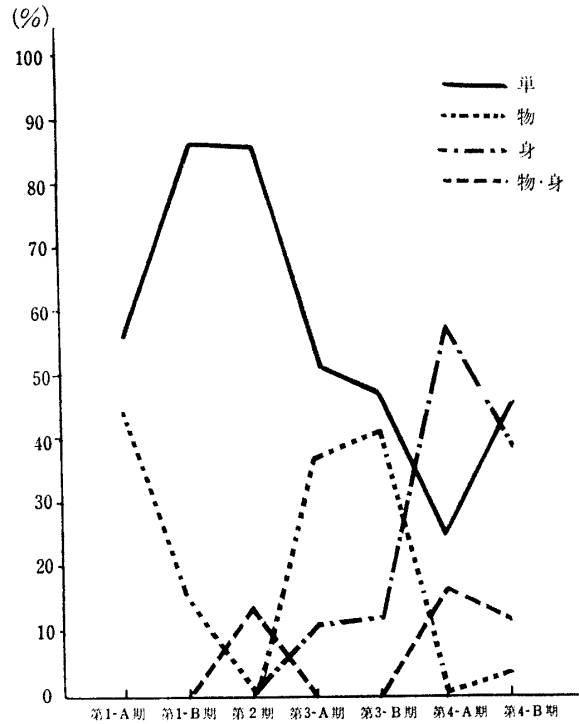


Fig. S-11 verbal なTのCに対する働きかけ方の百分率

Table S-12 behavioral なCの働きかけに対するTの反応

Tの反応		期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
有			0(0.0)	2(50.0)	2(40.0)	1(50.0)	7(70.0)	9(81.8)	14(82.4)
無	無		0(0.0)	2(50.0)	3(60.0)	1(50.0)	3(30.0)	2(18.2)	3(17.6)
	物		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0	0

() 内 百分率

Table S-13 verbal なCの働きかけに対するTの反応

Tの反応		期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
有			0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)	0(0.0)	4(80.0)
無	無		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(20.0)
	物		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

() 内 百分率

Table S-14 Cの働きかけに対するTの反応 (ブレンドを含む)

Tの反応		期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
有			0(0.0)	3(60.0)	2(40.0)	2(66.7)	8(72.7)	9(81.8)	22(81.5)
無	無		0(0.0)	2(40.0)	3(60.0)	1(33.3)	3(27.3)	2(18.2)	5(18.5)
	物		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

() 内 百分率

は behavioral と同じく身体を介した時期と見てよいであろう。

⑥ Cの働きかけに対するTの反応——本事例の場合Cからの働きかけが基本的にすくなく分析に耐えないがTable S-12は behavioral なCの働きかけに対するTの反応を、Table S-13は verbal なCの働きかけに対するTの反応を、Table S-14はCの働きかけに対するTの反応 (behavioral+verbal + ブレンド) を示してある。すべての働きかけに対してTが物への働きかけに移ってってしまう動きは1つも見られていな

い。またCの働きかけに対しての反応無しのもが第1-A期は無いが、他期において5個までの中において「反応無」が見られている。特別に期による変化は見られないが、またTのサンプル数の内では問題になるほどの数ではないが、基本的に働きかけのすくないCであるのでその動きに対してTとしては反応を示していかなければならないにもかかわらず、わずかでも反応の無いことのあることは問題として残るであろう。同じ視点で問題となるものとして Tar (absence of therapist's role) の項目が問題となる。修正頻数でなく見ていく

Table S-15

C の active カテゴリーにおける頻数

	カテゴリー	項目	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期	
CAB	I 働きかけ	指示・働きかけ・命令	0	2	2	1	3	0	1	
		誘引	0	0	0	0	0	1	0	
		攻撃	0	0	0	0	0	0	0	
	II 弱い働きかけ	自己顕示・承認を求める	0	0	0	0	1	0	0	
		助力を求める	0	0	0	0	1	0	0	
		注視	0	2	3	1	5	3	10	
	III 身体的働きかけ	身体接触を求める	0	0	0	0	0	2	0	
		身体接触	0	0	0	0	0	0	4	
	IV 物への働きかけ	物の注視	1	0	1	6	2	1	0	
		物への働きかけ	7	6	7	17	13	20	5	
		物の使用	22	24	23	5	9	18	8	
	V 感情表現	笑い	0	0	0	0	6	4	5	
		泣き	0	0	0	0	0	1	0	
	VI 無目的的行動	室内移動	10	7	5	8	1	3	3	
CAB Total			40	41	41	38	41	53	36	
CAV	I 言葉での働きかけ	指示・命令	0	0	0	0	0	0	0	
		誘引	0	0	0	0	0	0	0	
		攻撃	0	0	0	0	0	0	0	
	II 言葉での弱い働きかけ	自己顕示・承認を求める	0	0	0	0	0	0	0	
		助力を求める	0	0	0	0	0	0	0	
	III 問いかけ	話しかけ・問いかけ	0	0	0	1	1	0	0	
		呼びかけ	0	0	0	0	0	0	0	
	IV 身体接触の要求	身体接触の要求	0	0	0	0	0	0	3	
	CAV Total			0	0	0	1	1	0	3

と、第1-A期と第3期は無し、第1-B期と第4-A期が1個、第4-B期が2個、第2期は4個見られている。

Cの働きかけに対するTの反応とTarの頻数の二面から見ていくと、第1-A期は問題が無く、第4-B期は両面において問題が多く見られる。

⑦ Tに関する結果の要約—Tのサンプル数は期が進むに従って増加し、第4-B期は第1-A期に比して2倍になっており総サンプル数と同様の変化をしている。従ってCのサンプル数も同様の変化が見られるが、TとCとの総サンプル数で占める比率ではわずかではあるが第3期よりTが優勢となっている。

Tの動きの大部分がTABであり、すべての期において最も多くを占めている。他のカテゴリーとの関係において各期を2群に分けることができる。1つはTABとTAVがほぼ同比率になっている第3-A期と第4-B期、今1つはTABが優勢でTAVがほとんど無い群として第1期、第2期、第3-B期、第4-A期である。後者の群においてもさらに2つ分けられTPBの占める比率が第3-B期と第4-A期は多く、第1期と第2期は少ない。仮に前者の群をB-V群、後者をB群とすると、B群のTABのサブカテゴリーでは「I働きかけ」と「II弱い働きかけ」の和の『働きかけ』が70~80%を占めており、残りは「IV物への働きかけ」と「III身体的働きかけ」である。但し第2期のみ『働きかけ』が90%であり「III身体的働きかけ」が無い。B-V群ではTABの内容は第3-A期は「IV物への働きかけ」が70%の期であり、第4-B期は『働きかけ』50%の期で「III身体的働きかけ」が40%見られている。TAVのサブカテゴリーにおいてTAVの比率の高いB-V群では第3-A期は「III問いかけ」80~100%の群であり最も多い群となっており、第4-B期は「III問いかけ」が60%と比較的少ないが、2期とも50%以上が「III問いか

け」である。B群のTAVのサブカテゴリーでは「III問いかけ」に関して第1期は80~100%、第2期は50%、第3-B期は60%、第4-A期は20%と一貫した傾向は持っていない。

TのCに対する働きかけ方においては第1期は物を介して、第2期と第3期は単独、第4期は身体接触による働きかけ方が期によっての相異が明らかに見られる。

Cの働きかけに対するTの反応としては物に行ってしまう反応はみとめられず、反応無しといわれるものがわずかであるが見られた。Tarとの関係で見えていくと第1-A期は良い期で、第4-B期はすくない頻数の内ではあるが最悪の期となっている。

(2) C側の分析

① Cの動きの分析—Table S-15~S-17は、Clientのカテゴリーにおける active behavior (以下CABとする)、passive behavior (以下CPBとする)、active verbal (以下CAVとする)、passive verbal (以下CPVとする)等についての単純集計のTableである。又各期とも10分に換算した修正頻数をTable S-18, Fig. S-12に示しておく。なおbehavioralなものが大半を占めているため修正頻数はCABとCPBのみを示しておいた。CABに関して見てみると第1期、第2期、第3-B期と同程度の頻数が見られ、第3-A期と第4-B期は同程度で最もすくない期となっており、第4-A期のみ最も高く67を示している。CPBはCABに比較して変化の幅がせまいが、第3-A期、第4-A期がすくない期であり他の期はほぼ同じ頻数で前者よりやや多い。

次にサブカテゴリー別に検討してみると、Fig. S-13~S-18に示すように、CABの「I働きかけ」は第1-A期から第4-B期を通じてほとんど変化がみられないが、「II弱い働きかけ」は第3-B期以降の増加が目立つ。「III身体的働きかけ」がわずかであるが第4-

Table S-16

Cのpassiveカテゴリーにおける頻数

カテゴリー	項目	第1-A期	第2-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
C P B	(1) 従属	1	0	4	1	3	3	5
	(2) 模倣	0	0	0	0	4	0	1
	(3) 拒否	0	3	0	0	3	0	3
	(4) 応答	7	6	1	2	0	0	1
	C P B Total	8	9	5	3	10	3	10
C P V	(1) 応答	0	0	0	0	0	0	0
	(2) 言葉での拒否	0	0	0	0	0	0	4
	C P V Total	0	0	0	0	0	0	4

Table S-17 Caa と特異行動の頻数

期 カテゴリー	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
Caa (傍観)	2(2)	0	8(10)	0	1(1)	2(3)	12
CBB (常同行動)	0	0	0	0	0	0	0
CBV (1) 独語	0	0	0	0	0	0	0
CBV (2) 奇声	2(2)	2(3)	1(1)	11	0	0	12
CBV (3) echolalia	0	0	0	0	0	0	0
Total	4(4)	2(3)	9(11)	11	1(1)	2(3)	24

() 内 修正頻数

Table S-18 C の Active カテゴリーにおける修正頻数

カテゴリー	サブカテゴリー	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
CAB	I 働きかけ	0	3	3	1	4	1	1
	II 弱い働きかけ	0	3	4	1	8	4	10
	III 身体的働きかけ	0	0	0	0	0	3	4
	IV 物への働きかけ	33	38	39	28	28	49	13
	V 感情表現	0	0	0	0	7	6	5
	VI 無目的的行動	11	9	6	8	1	4	3
	Total	44	53	52	38	48	67	36
CPB	I 従属	1	0	5	1	4	4	5
	II 模倣	0	0	0	0	5	0	1
	III 拒否	0	1	0	0	4	0	3
	IV 応答	8	8	1	2	0	0	1
	Total	9	12	6	3	13	4	10
Total		53	65	58	41	61	71	46

A期から出てきているのはCの変化としては大きなものであろう。「V感情表現」は第3-B期より出現していることは意味がある。しかし増加していつている傾向は見られない。一方、物への働きかけ、「IV無目的的行動」は漸次減少してきている。つまり、第3-B期を境にTと無関係な行動は減少し、しだいにTと関係のある行動が増加してきているといえる。CPBとブレンドに関しては頻数がすくないため Table を示すにとどめる。

次に Caa と特異行動に関しては、Table S-17 に示されるように、CBB (常同行動)、CBVの独語とecholalia は1つも見られていない。しかし Caa は第1-B期と第3-A期以外のすべての期に見られ、第2期と第4-B期は目立って多い。CBVの奇声においては、第3-B期と第4-A期の2期のみ見られていない。第3-A期と第4-B期は目立って多い。Totalで

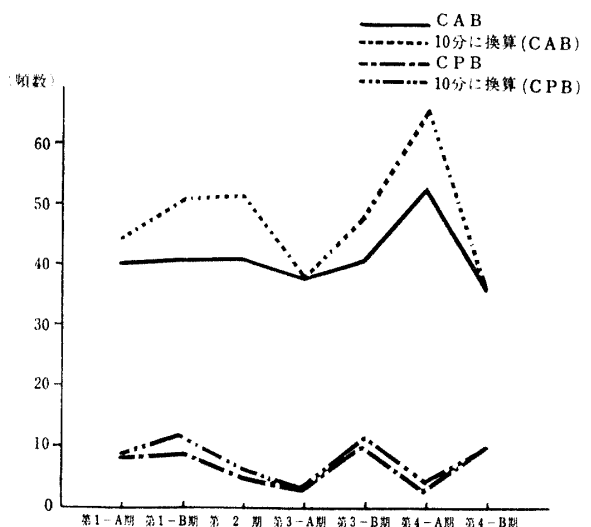


Fig. S-12 C の active カテゴリーにおける頻数

自閉症に関する研究

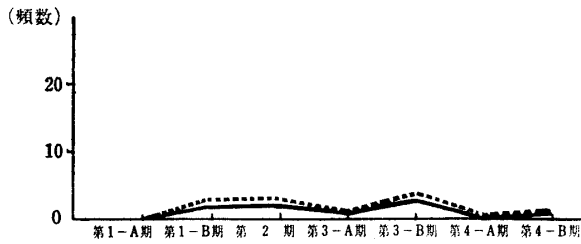


Fig. S-13 「I働きかけ」における頻数

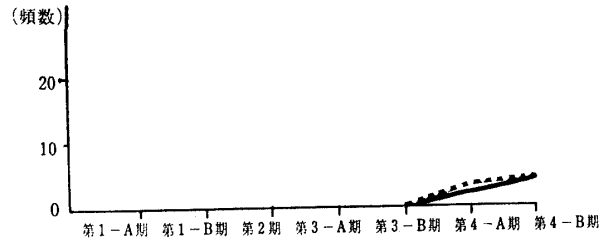


Fig. S-16 「III身体的働きかけ」における頻数

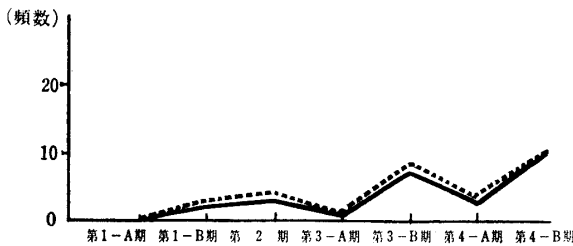


Fig. S-14 「II弱い働きかけ」における頻数

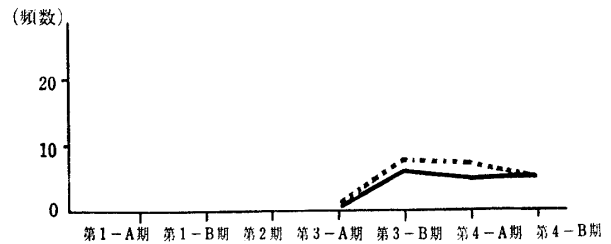


Fig. S-17 「V感情表現」における頻数

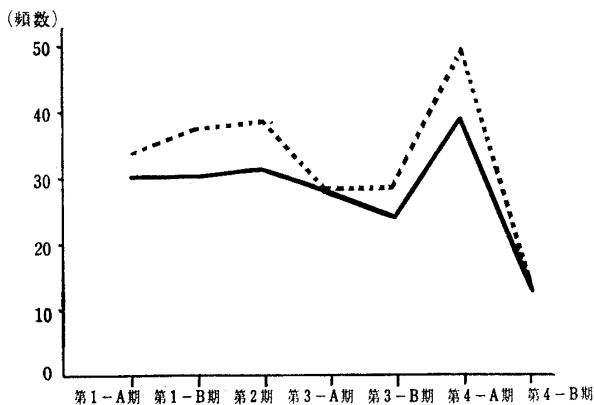


Fig. S-15 「IV物への働きかけ」における頻数

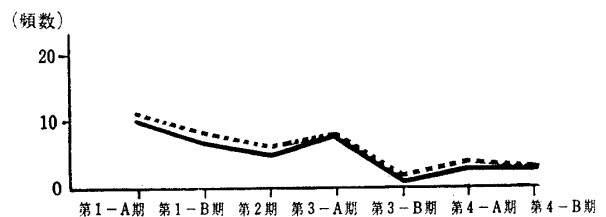


Fig. S-18 「VI無目的的行動」における頻数

見ると第2期、第3-A期、第4-B期においては他期に比べて特異行動の多い期である。

Table S-19, S-20, Fig. S-19は、Cの active

Table S-19 Cの active と passive の頻数とその百分率 (ブレンドを含む)

期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
active	40(82.9)	42(80.0)	41(89.1)	39(92.9)	42(80.8)	53(94.7)	39(72.2)
passive	8(17.1)	10(19.2)	5(10.9)	3(7.1)	10(19.2)	3(5.3)	15(27.8)

() 内 百分率

Table S-20 Cの behavioral と verbal の頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
behavioral	48(100.0)	50(100.0)	46(100.0)	41(97.6)	51(98.1)	56(100.0)	46(86.8)
verbal	0	0	0	1(2.4)	1(1.9)	0	7(13.2)

() 内 百分率

と passive, behavioral と verbal に関して頻数を示している。

active の百分率は各期とも70%以上を示しており, passiveに比較して圧倒的に多くなっている。その内で第2期, 第3-A期, 第4-A期は90%前後であり, 第4-B期が他期比較して目立って低い。又, behavioral の百分率が第4-B期を除くすべての期において, 100%又はそれに近い割合を占めている。第4-B期では, behavioral は86.8%になり, verbal が若干出現している。

次に, CAB, CAV, CPB, CPVについて各サブカテゴリー別に検討したものを, Table S-21~S-24に, Fig. S-20はカテゴリー間の百分率を示したものである。

第1-A期, 第1-B期, 第2期においては, CAB, CPBのみであり, CABがCPBのほぼ6倍を占めている。第3-A期から第4-A期までも同様の傾向であるが, CAVが第3-A期から, CPVが第4-B期から若干現われてきている。第4-B期のみがCABが50%以下になっている。

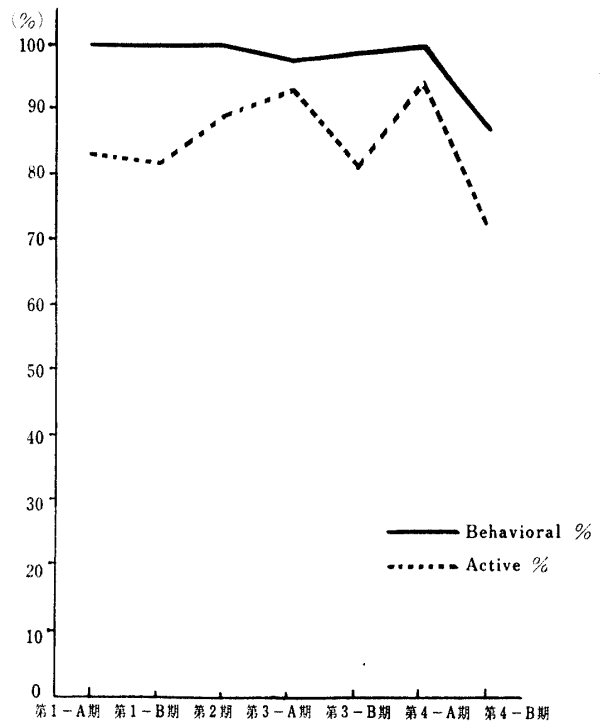


Fig. S-19 C の behavioralの百分率 と verbal の百分率

Table S-21 CABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
I 働きかけ		0	2(4.9)	2(4.9)	1(2.6)	3(7.3)	1(1.9)	1(2.8)
II 弱い働きかけ		0	2(4.9)	3(7.3)	1(2.6)	7(17.1)	3(5.7)	10(27.8)
III 身体的働きかけ		0	0	0	0	0	2(3.8)	4(11.1)
IV 物への働きかけ		30(75.0)	30(73.2)	31(75.6)	28(73.7)	24(58.5)	39(73.6)	13(36.1)
V 感情表現		0	0	0	0	6(14.6)	5(9.4)	5(13.9)
VI 無目的的行動		10(25.0)	7(17.1)	5(12.2)	8(21.1)	1(2.4)	3(5.7)	3(8.3)
Total		40(65.6)*	41(70.7)*	41(74.6)*	38(62.3)*	41(74.6)*	53(86.9)*	36(46.8)*

* ; Cの総サンプル数に対する百分率, ()内は百分率

Table S-22 CAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
I 言葉での働きかけ		0	0	0	0	0	0	0
II 言葉での弱い働きかけ		0	0	0	0	0	0	0
III 問いかけ		0	0	0	1(100.0)	1(100.0)	0	0
IV 身体接触の要求		0	0	0	0	0	0	3(100.0)
Total		0	0	0	1(1.6)*	1(1.8)*	0	3(3.9)*

* ; Cの総サンプル数に対する百分率, ()内は百分率

自閉症に関する研究

Table S-23 CPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
I 従属		1(12.5)	0	4(80.0)	1(33.3)	3(30.0)	3(100.0)	5(50.0)
II 模倣		0	0	0	0	4(40.0)	0	1(10.0)
III 拒否		0	3(33.3)	0	0	3(30.0)	0	3(30.0)
IV 応答		7(87.5)	6(66.7)	1(20.0)	2(66.7)	0	0	1(10.0)
Total		8(13.1)*	9(15.5)*	5(10.9)*	3(4.9)*	10(18.2)*	3(4.9)*	10(13.0)*

* ; Cの総サンプル数に対する百分率, ()内は百分率

Table S-24 CPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
I 応答		0	0	0	0	0	0	0
II 言葉での拒否		0	0	0	0	0	0	4(100.0)
Total		0	0	0	0	0	0	4(5.2)*

* ; Cの総サンプル数に対する百分率, ()内は百分率

次に、Cのサンプル数の大半を占めているCABについて、各サブカテゴリー別に時期による変化をみてみよう。Fig. S-21に示すように、第1-A期は「IV物に対する働きかけ」と「VI無目的的行動」が示されているのみである。第1-B期以降、「I働きかけ」、「II弱い

働きかけが出現し、第3-B期では「V感情表現」が、第4-A期では「III身体的働きかけ」が新たに出現している。期がすすむに従いカテゴリーの種類が増加し、第4-B期では、第1-A期において非常に多くの割合を占めていた「IV物への働きかけ」、「VI無目的的行動」が減少し、Tとのかかわりを示すII, III, Vが増加してきている。

② Tの働きかけによるCの反応の分析—Table S-25, Fig. S-22はTの働きかけに対するCの反応の有り無しについて示したものである。反応がなされな

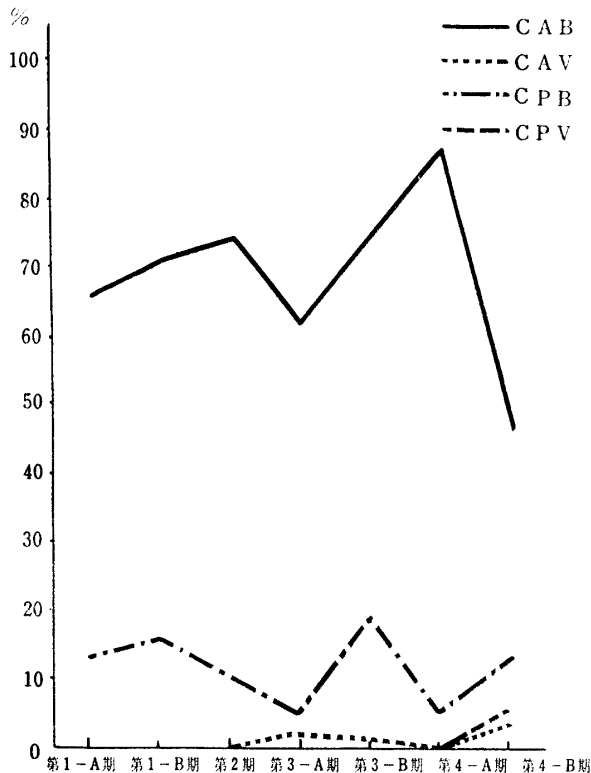


Fig. S-20 Cのカテゴリーにおける百分率

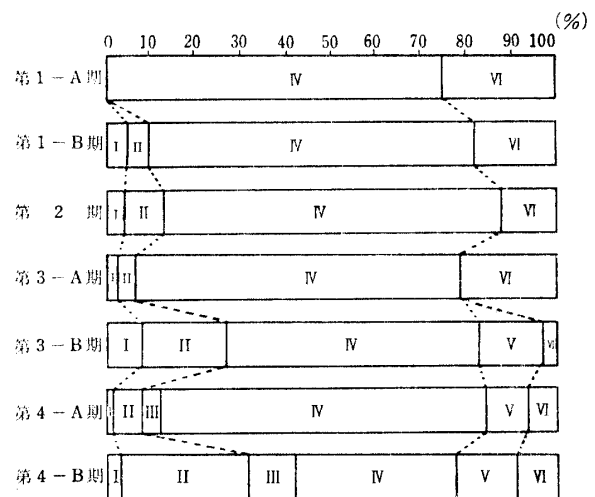


Fig. S-21 CABのサブカテゴリーにおける百分率

Table S-25

Tの働きかけに対するCの反応

(ブレンドを含む)

期		第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
有		7(22.6)	8(23.5)	8(25.8)	8(15.1)	16(29.1)	7(14.6)	20(15.8)
無	無	12(38.7)	13(38.2)	15(48.4)	37(69.8)	25(45.5)	24(50.0)	79(62.2)
	物	12(38.7)	13(38.2)	8(25.8)	8(15.1)	14(25.4)	17(35.4)	28(22.0)

() 内は百分率

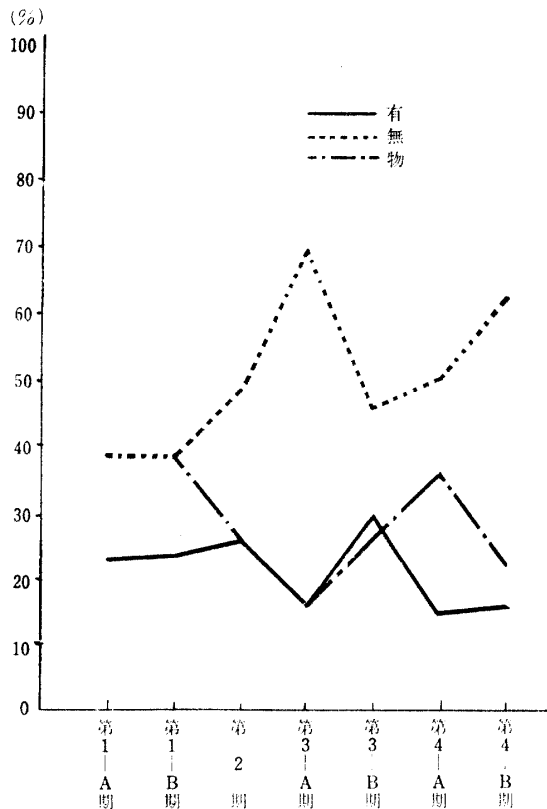


Fig. S-22 Tの働きかけに対するCの反応

ったものについては、全く反応がないものと、物に対して働きかけがなされたものに2分してある。

反応有りについてみると、第1期、第2期を通じて20%強であり、第3-B期が30%と最も高くなっている。しかし第3-A期と第4期は15%前後であり、比率においては第1期、第2期よりも低くなっているが、頻数としては第4-B期は最も多くなっている。

次に、TAB、TAVに対するCの反応を較してみよう。Table S-26、S-27、Fig. S-23に示すように、ほとんどの期において、behavioralな働きかけに対する反応が、verbalな働きかけに対する反応よりも多くなっている。わずかながら第1-B期と第4-B期はTAVの方がCの反応率は高くなっている。

Tの働きかけを、「物」を介したもの、「身体」を介したもの、「物・身体」両方を介したもの、何も介さない単独な働きかけに4分し、それぞれについてCの反応をみたものが、Table S-28である。

第1期～第2期は単独な働きかけと「物」を介した働きかけが大多数であるが、「物」を介した働きかけの方が、多くのCの反応をひき起こしている。第3期以降は大きな差異はみられなくなっている。

Table S-26

TABに対するCの反応

期		第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
有		6(27.3)	2(10.5)	6(30.0)	3(23.1)	11(30.6)	6(16.7)	7(11.7)
無	無	6(27.3)	9(47.4)	8(40.0)	9(69.2)	18(50.0)	14(38.9)	40(66.7)
	物	10(45.5)	8(42.1)	6(30.0)	1(7.7)	7(19.4)	16(44.4)	13(21.6)

() 内は百分率

Table S-27

TAVに対するCの反応

期		第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
有		1(11.1)	1(14.3)	1(14.3)	5(13.5)	4(23.5)	1(8.3)	9(17.0)
無	無	6(66.7)	4(57.1)	4(57.1)	25(67.6)	6(35.3)	10(83.4)	34(64.2)
	物	2(22.2)	2(28.6)	2(28.6)	7(18.9)	7(41.2)	1(8.3)	10(18.8)

() 内は百分率

自閉症に関する研究

Table S-28

Tの働きかけの差異に対するCの反応

(ブレンドを含む)

物を介する	身体を介する	Cの反応	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
-	-	有	0(0)	1(6.3)	2(11.7)	6(28.6)	2(14.3)	3(25.0)	3(6.0)
		無	11(100.0)	15(93.7)	15(88.3)	15(71.4)	12(85.7)	9(75.0)	50(94.0)
+	-	有	6(35.3)	7(38.9)	6(50.0)	0(0)	11(39.3)	0(0)	3(60.0)
		無	11(64.7)	11(61.1)	6(50.0)	22(100.0)	17(60.7)	2(100.0)	2(40.0)
-	+	有	1(100.0)	0(0)	0(0)	2(22.2)	2(16.7)	4(15.4)	14(23.3)
		無	0(0)	0(0)	0(0)	7(77.8)	10(83.3)	22(84.6)	46(76.7)
+	+	有	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(100.0)	0(0)	0(0)
		無	2(100.0)	0(0)	2(100.0)	1(100.0)	0(0)	8(100.0)	9(100.0)

()内は百分率

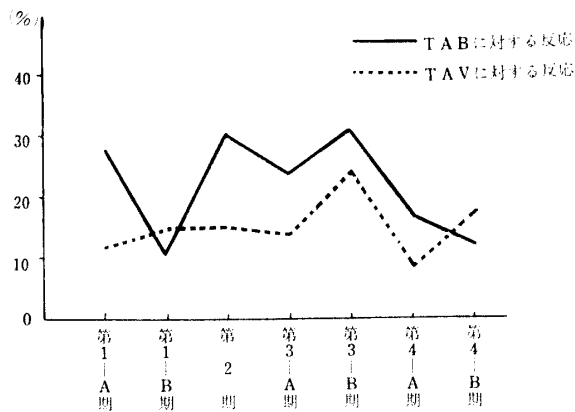


Fig. S-23 TAB, TAVに対するCの反応

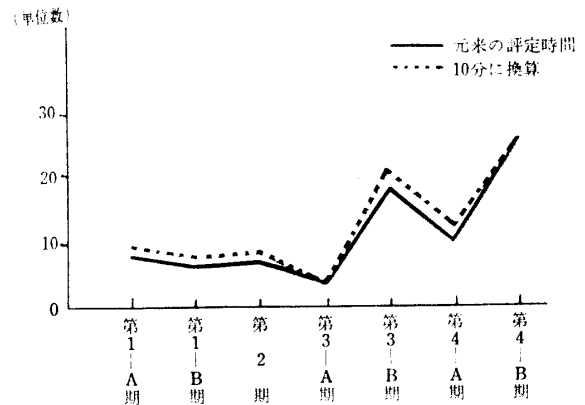


Fig. S-24 T-Cのinteractionの頻数

3) TとCの interaction の分析—Tからの働きかけによりCが反応した場合 (T→C), 又は, Cからの働きかけによりTが反応した場合 (C→T)を1単位

の interaction 単位として, T, C 相互の関係をみたものが, Table S-29, Fig. S-24である。第1期~第3-A期は, 1単位のもの最も多くなっているが,

Table S-29

T-Cの interaction の頻数

期	第1-A期	第1-B期	第2期	第3-A期	第3-B期	第4-A期	第4-B期
1	5	6	3	1	7	4	10
2			2	1	2	0	1
3	1				1	2	1
4					1		1
5							0
6							0
7							1
延頻数	8	6	7	3	18	10	26

第3—B期以降、3単位以上のものが出現し、第4—B期では、7単位のものが見られるようになっている。

各期の interaction の頻数を全部1単位に換算した延頻数の Fig. S—24からも、第3—B期以降 interaction の量が増加していることがわかる。また第1期と第2期はほとんど差がなく、第4—B期が最も interaction の量が多くなっている。

④ 他児(C₀)および他のT(T₀)への働きかけに関して——第2期まで全く見られず、第3—A期において「T₀」へが1個、第3—B期で「T₀・C₀」へが1個、第4—A期では「T₀」へが1個、「T₀・C₀」へが1個見られ、第4—B期では「C₀」へが2個見られた。

⑤ Cに関する結果の要約——Cの動きはCAB中心の動きは各期とも共通している。そして第1期はCABとCPBのみであり、第3—B期でCAVの出現、第4—B期でCPVの出現が見られる。CABのサブカテゴリーでは「IV物への働きかけ」が中心となっており、それに「VI無目的的行動」が加わっている構成から、それらが漸次減少して行き、第1—B期では『働きかけ』の出現、第3—B期では、「V感情表現」の出現と同時に「II弱い働きかけ」の増加と「VI無目的的行動」の減少が見られる。第4—A期では最も多くのサブカテゴリーの種類が見られる期となっている。

Tの働きかけに対してCの反応は一般的に物を介する事によるものと、behavioral な働きかけに反応が多く見られた。しかし物を介しての反応の多さは第2期までで、verbal に対する反応の多い期は第1—B期と第4—B期に見られた。働きかけのうち、最も反応のあった期が第3—B期であり、最もなかった時期が第4—B期であり、第1期と第2期はその中間であった。

TとCの interaction は第3—A期まで1単位の interaction であり、第3—B期からは長い interaction の出現と延べ interaction 数は第3—B期より急増している。

特異行動は主に奇声であった。特に第2期、第3—A期、第4—B期に多く見られた。

T₀ や C₀ への働きかけは第III期より出現してきており、1個ないし2個ではあるが意味ある動きである。しかし第4期になって増加することは無かった。

2. 事例「鈴〇〇〇美」の考察

昨年の本紀要第17巻において事例史と治療過程の変化について昨年報告してあるので、考察に先き立ってその要約を述べる。

第1期は「Cの孤立と拒否と周囲への無関心期」

第2期は「CのTへの働きかけと応答と感情表現期」

第3期は「Tの働きかけの拒否と周囲からのTへの逃避期」

第4期は「つながり期」

と呼べるであろう。この呼称はTの体験の記述において呼ばれるものであり、今回の分析においてその overt な所での T→C, C→T, T↔C, C→C₀, C→T₀ はどのようであったかを問題とし、各期の内容の分析を昨年段階で概観して見ると、第1期から第2期へと変化・展開が見られるが、第3期では第1期への逆戻りのようにTは受けとっている。そして第4期で初めて「つながり」を体験していると見てよいであろう。第1期と第3期の共通なものとしてTのあげているものに「Cと母親との分離困難」がある。しかし第1期は「周囲への無関心」が中核にあり、第3期では「無関心」ではなく「周囲からTへの逃げこみ」とTが動こうとすると「拒否」してくる反応がそこにTとしては体験されている。

次にVTRの評定結果におけるものとの関連で検討していくと、Tの体験として全く異ったCの状態として受けとめている第1期と第2期に関しては、Cの動きとしては2期ともCABの中心の動きであり、第1—B期においてすでにCABのサブカテゴリーの「I働きかけ」「II弱い働きかけ」は出現しており第2期と第1—B期とは異ならない。しかし第1—A期では、「IV物への働きかけ」と「VI無目的的行動」だけであり第2期とのちがいはある。つまり、第1期の前半においては、Tへの動きの全くないCの動きであり、Tの体験されているものを明確に示している。第1期の後半においては変りないものであるが、第2期ではCPBにおいて第1期における応答が無くなり従属に変っている点が見られるが体験とは全く逆なものが見られている。それは従属というものによってTの動きに対するCの応答とTがそれによって体験されているものとなったのではなからうか。その体験に影響を与えるものとしては、第1期ではCPBの拒否が見られるが、第2期は全く見られていない。interaction についても第1期と第2期は1単位のものであり延頻数においても変化は無い。さらにCの特異行動は第2期に多く出ている。一方Tの動きとしてはTABが2期とも中心となる期であり、第1期と第2期ともにTABのサブカテゴリーでは『働きかけ』が中心となっており、異なるのは第1期にあった「III身体接触」が第2期で無くなっている点である。また働きかけ方においても第1期は物を介した働きかけ方であるが第2期は単独である。この事はTの動きとして第1期はCに対しての拒否にあり、物をもって働きかけていかないと安定

できないTから物を介さずとも働きかけていけるTとして見ることはできるのではないであろうか。

第3期はCABの「感情表現が」出現し、「無目的的行動」は減少し、TとCのinteractionにおいて多く連続するものが出現してきている。CABの「拒否」が第1期同様4個見られる期であると同時にT₀やC₀への働きかけが1個ずつ出てきた期でもある。このようにCの動きはTへの拒否があるが、無関心の存在からnegativeであってもそのCの動きの見られる時期としてTの体験をうらづけるものが見られている。ここでのinteractionの長さはその意味で連続したものとなるのであろう。一方Tの動きはTABの『働きかけ』が中心であり、第3—A期は「IV物への働きかけ」が大部分で第3—B期は「I働きかけ」、「II弱い働きかけ」が大部分となっている。さらに、その働きかけ方は物と身体接触の両方を介しての働きかけ方をしている。第2期とはTにおいては働きかけ方のちがいがあり、この点で働きかけ方において第2期よりもより多面的な物に自閉症児にとって意味する身体的働きかけになっている。

第4期においてはverbalの面がC側にもT側にも目立ち、全期のうちでCABが最もすくない期である。しかし奇声も目立ち、第3期より多くなっている。CABの内容として「III身体的働きかけ」が4期になって出現しており、「IV物への働きかけ」、「VI無目的的行動」がほとんど見られなくなり、Tの体験にあるようにかか

わりの時期となっていると見てよいであろう。TとCのinteractionも最も多く、長い単位のもので出現している。一方Tの動きとして第3期と異なる点は、「働きかけ」が第4期では身体接触によるものが大部分を占めている点である。TAVにおいても「問いかけ」というような、とかく空転しがちな働きかけから、「弱い言葉による働きかけ」ではあるが「働きかけ」になるものによってきていることはCの変化によるTの動きとして了解できるものである。

このように各期を見てくると、Tの体験をうらづけるdataとなっているようであり、さらにそれを規定している要因が明確になってきた。

(蔭山英順, 小沢久美子)

3. 事例「高〇〇子」の結果

2つ以上の項目を含んでいるサブカテゴリーを内包しているカテゴリー(TAB, TAV, CAB, CAV)についての、各々の項目における頻数をTable T—1～Table T—4に示した。これらの結果と、他のカテゴリーにおける結果とをもとにして、以下のなかで種々の観点について整理していく事にする。

(1) T及びCのサンプル数の頻数とその百分率をTable T—5に示した。これによると、各期共に、TとCのサンプル数の間に大きな差異は示されておらず、総サンプル数においても大きな差異は示されていない。

(2) 次に、Tについての分析、検討をしていく事にする。

Table T—1 TABの項目における頻数

サブカテゴリー	期	第1—A期	第1—B期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
		I 働きかけ	制止・禁止	0	0	0	0
	指示・働きかけ	8	11	10	13	15	9
II 弱い働きかけ	助力	1	4	1	2	3	0
	模倣	0	0	3	1	2	2
	注視	7	4	5	3	3	3
III 身体的働きかけ	身体接触(抱き上げる等)	0	0	0	0	1	0
	身体接触	0	0	0	0	1	1
IV 物への働きかけ	注視	0	0	0	0	0	1
	物への働きかけ(a)	0	0	1	0	1	3
	物への働きかけ(b)	0	0	0	0	0	1
V 感情表現	笑い	0	0	0	0	0	0
Total		16	19	20	19	26	21

Table T-2

TAVの項目における頻数

サブカテゴリー		期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 言葉での働きかけ	制止・禁止		0	0	0	0	0	0
	指示		3	2	0	1	2	4
II 言葉での弱い働きかけ	助力・はげまし		4	3	2	2	0	0
	模倣		0	0	0	0	0	0
	Cの要求・感情の言語化		0	4	1	1	0	0
III 問いかけ	話しかけ・問いかけ		13	21	7	10	12	17
	呼びかけ		0	0	0	0	0	2
Total			20	30	10	14	14	23

Table T-3

CABの項目における頻数

サブカテゴリー		期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 働きかけ	指示・働きかけ		7	9	9	8	8	2
	誘引		2	1	0	1	0	0
	攻撃		0	0	0	0	0	0
II 弱い働きかけ	自己顕示・承認を求める		0	0	0	1	1	2
	助力を求める		0	0	0	1	0	0
	模倣		0	0	0	0	1	0
	注視		3	3	4	3	5	6
III 身体的働きかけ	身体接触を求める		0	0	0	0	0	0
	身体接触		0	0	0	0	0	0
IV 物への働きかけ	注視		0	0	0	0	0	1
	物への働きかけ(a)		14	12	13	17	15	10
	物への働きかけ(b)		18	16	13	5	13	8
V 感情表現	笑い		0	0	0	0	0	0
	泣き		0	0	0	0	0	0
VI 無目的的行動	室内移動		4	1	1	0	0	1
Total			48	42	40	36	43	30

自閉症に関する研究

Table T-4 CAVの項目における頻数

サブカテゴリー		期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 言葉での働きかけ	指示・命令		0	1	0	1	1	3
	誘引		1	0	1	0	0	0
	攻撃		0	0	0	0	0	0
II 言葉での弱い働きかけ	自己顕示・承認を求める		0	2	0	1	0	0
	助力を求める		0	1	0	0	0	0
III 問いかけ	話しかけ・問いかけ		9	10	17	16	7	6
	呼びかけ		0	0	1	0	0	0
IV 言葉での身体接触の要求	身体接触の要求		0	0	0	0	0	0
Total			10	14	19	18	8	9

Table T-5 Tのサンプル数とCのサンプル数の頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
T	67(50.4)	80(53.7)	53(42.1)	66(50.4)	68(46.3)	68(54.4)
C	66(49.6)	69(46.3)	73(57.9)	65(49.6)	79(53.7)	57(45.6)
総サンプル数	133	149	126	131	147	125

() 内 百分率

Table T-6 TABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 働きかけ		8(50.0)	11(57.9)	10(50.0)	13(68.4)	15(57.7)	10(47.6)
II 弱い働きかけ		8(50.0)	8(42.1)	9(45.0)	6(31.6)	8(30.8)	5(23.8)
III 身体的働きかけ		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(7.8)	1(4.8)
IV 物への働きかけ		0(0)	0(0)	1(5.0)	0(0)	1(3.9)	5(23.8)
V 感情表現		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total		16(23.9)*	19(23.8)*	20(38.5)*	19(29.2)*	26(38.2)*	21(31.3)*
Tのサンプル数		67	80	53	66	68	68

() 内百分率, * ; Tのサンプル数に対する百分率

(2-a) TABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を Table T-6 に示した。そして、その中で「II弱い働きかけ」についての項目における頻数を取り出し、Fig. T-1 に図示した。

Fig. T-1 により、「注視」が第1期より第3期にかけて徐々に減少していき、逆に「模倣」が第2期より少しずつ現われてきているという傾向が認められる。

(2-b) TAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を Table T-7 に示した。これによると、第1期及び第3期に比べて、第2期におけるTAVの減少といった傾向が認められる。

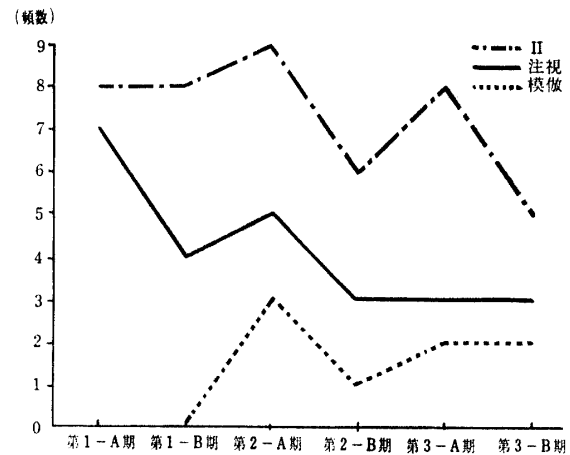


Fig. T-1 IIと項目(模倣・注視)における頻数

Table T-7 TAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 言葉での働きかけ		3(15.0)	2(6.7)	0(0)	1(7.1)	2(14.3)	4(17.4)
II 言葉での弱い働きかけ		4(20.0)	7(23.3)	3(30.0)	3(21.4)	0(0)	0(0)
III 問いかけ		13(65.0)	21(70.0)	7(70.0)	10(71.4)	12(85.7)	19(82.6)
Total		20(29.9)*	30(37.5)*	10(19.2)*	14(21.5)*	14(18.0)*	23(34.3)*
Tのサンプル数		67	80	53	66	68	68

() 内百分率, * ; Tのサンプル数に対する百分率

Table T-8 TPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 従属		0(0)	0(0)	3(30.0)	2(40.0)	4(36.4)	1(50.0)
II 模倣		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
III 態度での容認		2(66.7)	7(77.8)	3(30.0)	2(40.0)	4(36.4)	0(0)
IV 後追い		1(33.3)	2(22.2)	4(40.0)	1(20.0)	3(27.3)	1(50.0)
V 拒否		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total		3(4.5)*	9(11.3)*	10(19.2)*	5(7.7)*	11(16.2)*	2(3.0)*
Tのサンプル数		67	80	53	66	68	68

() 内百分率, * ; Tのサンプル数に対する百分率

(2-c) TPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を Table T-8 に示した。これによると、イ) 他の期に比べて、第2-A期及び第3-A期におけるTPBの増加の傾向が認められる、ロ) 「従属」が第2期より現われてきている。

(2-d) TPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を Table T-9 に示し、それを Fig. T-2

に図示した。

これらにより、第1期及び第3期に比べて、第2期におけるTPVの増加の傾向が認められる。

(2-e) Tの behavioral 及び verbal のカテゴリーにおける頻数とその百分率を Table T-10 及び Table T-11 に示し、更にそれらを Fig. T-3 及び Fig. T-4 に図示した。

自閉症に関する研究

Table T-9 TPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 言葉での従属		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(25.0)	1(8.3)
II 言葉での容認		1(9.1)	0(0)	0(0)	1(5.0)	1(12.5)	0(0)
III 応答・受容		10(90.9)	11(100)	9(100)	19(95.0)	5(62.5)	11(91.7)
IV 言葉での拒否		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total		11(16.4)*	11(13.8)*	9(17.3)*	20(30.8)*	8(11.8)*	12(17.9)*
Tのサンプル数		67	80	53	66	68	68

() 内百分率, * ; Tのサンプル数に対する百分率

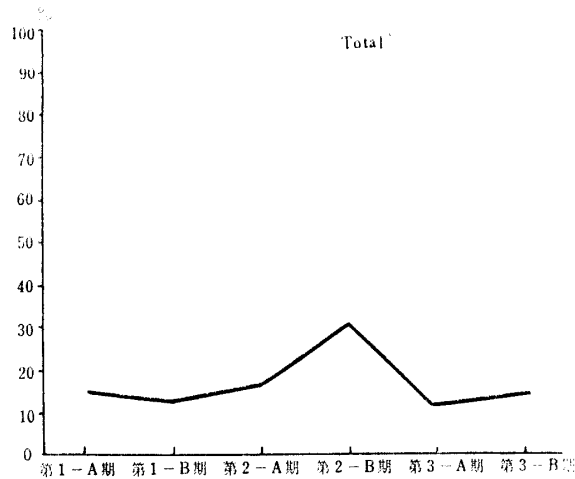


Fig. T-2 TPVにおける百分率

Table T-10 Tの behavioral* カテゴリーにおける頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
T A B	16(32.0)	19(27.5)	20(40.8)	19(32.8)	26(44.1)	21(36.2)
T P B	3(6.0)	9(13.0)	10(20.4)	5(8.6)	11(18.6)	2(3.5)
Total	19(38.0)	28(40.6)	30(61.2)	24(41.4)	37(62.7)	23(39.7)
behavioral** + verbal	50	69	49	58	59	58

() 内百分率, * ; TAB+TPB, ** ; TAB+TPB+TAV+TPV

Table T-11 Tの verbal* カテゴリーにおける頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
T A V	20(40.0)	30(43.5)	10(20.4)	14(24.1)	14(23.7)	23(39.7)
T P V	11(22.0)	11(15.9)	9(18.4)	20(34.5)	8(13.6)	12(20.7)
Total	31(62.0)	41(59.4)	19(38.8)	34(58.6)	22(37.6)	35(60.3)
behavioral** + verbal	50	69	49	58	59	58

() 内百分率, * ; TAV+TPV, ** ; TAB+TPB+TAV+TPV

原

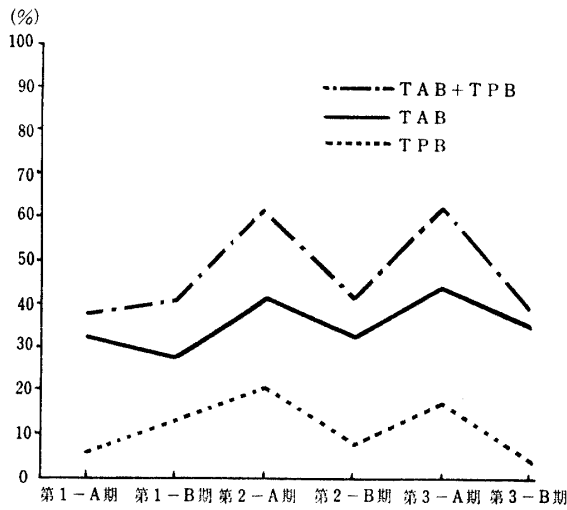


Fig. T-3 Tのbehavioral カテゴリーにおける百分率

著

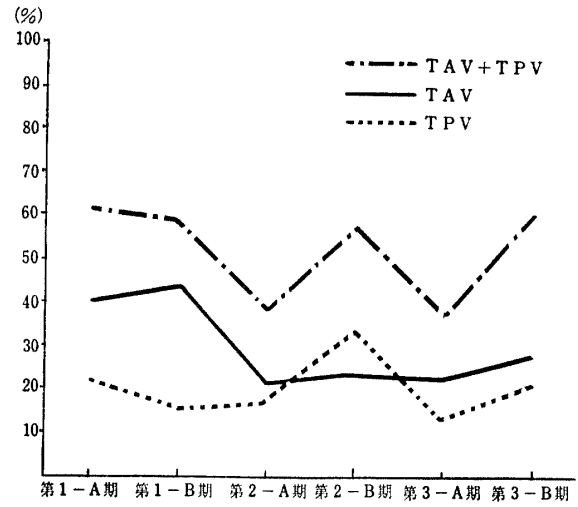


Fig. T-4 Tのverbal カテゴリーにおける百分率

Table T-12 Tの active* カテゴリーにおける頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
T A B	16(24.6)	19(24.4)	20(39.2)	19(29.7)	26(38.2)	21(31.8)
T A V	20(30.8)	30(38.5)	10(19.6)	14(21.9)	14(20.6)	23(34.9)
Total	51(78.5)** (15)***	55(70.5)** (6)***	32(62.8)** (2)***	37(57.8)** (4)***	49(72.1)** (9)***	52(78.8)** (8)***

()内百分率, *; TAB+TAV+Tのactiveブレンド, **; Tのactive+passive, ***; Tのactiveブレンド

Table T-13 Tの passive* カテゴリーにおける頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
T P B	3(4.6)	9(11.5)	10(19.6)	5(7.8)	11(16.2)	2(3.0)
T P V	11(16.9)	11(14.1)	9(17.7)	20(31.3)	8(11.8)	12(18.2)
Total	14(21.5)** (0)***	23(29.5)** (3)***	19(37.3)** (0)***	27(42.2)** (2)***	19(27.9)** (0)***	14(21.2)** (0)***

()内百分率, *; TPB+TPV+Tのpassiveブレンド, **; Tのactive+passive, ***; Tのpassiveブレンド

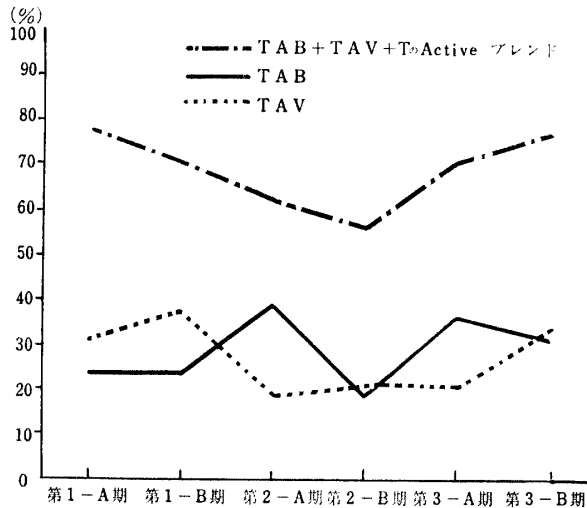


Fig. T-5 Tのactive カテゴリーにおける百分率

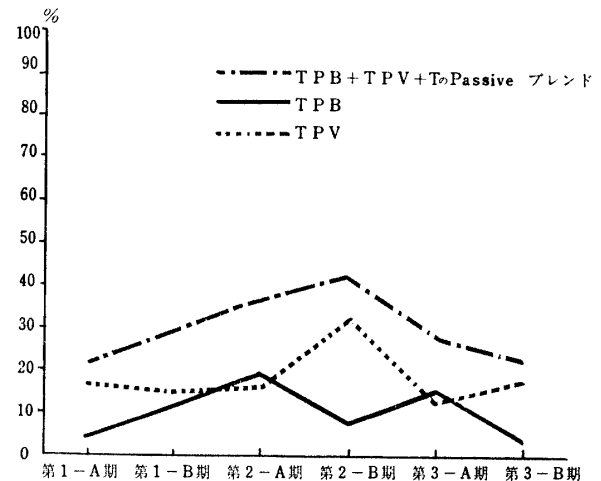


Fig. T-6 Tのpassive カテゴリーにおける百分率

自閉症に関する研究

これらにより、イ)他の期に比べると、第2—A期及び第3—A期は、behavioralが増加し、verbalが減少している、ロ)逆に、第1期、第2—B期、第3—B期においては、verbalが増加し、behavioralが減少しているといった傾向が認められる。

(2—f) Tのactive及びpassiveのカテゴリーにおける頻数とその百分率をTable T—12及びTable T—13に示し、更にそれらをFig. T—5及びFig. T—6に図示した。

これらにより、イ)他の期に比べて、第2期においてpassiveが増加し、activeが減少している、ロ)逆

に、第1期及び第3期においては、activeが増加し、passiveが減少しているといった傾向が認められる。

(2—g) TのCに対する働きかけ方の頻数とその百分率をTable T—14～Table T—16に示した。

これらにより、イ)第3期において、身体を伴った働きかけが比較的現われ始めている、ロ)behavioralな働きかけにおいては、物を媒介としての働きかけが多くみられ、verbalな働きかけにおいては、物を媒介としない単独な働きかけが多くみられているといった傾向が認められる。

Table T—14 behavioralなTのCに対する働きかけ方の頻数とその百分率

期 働きかけ方	第1—A期	第1—B期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
単	7(43.8)	10(52.6)	8(42.1)	5(26.3)	5(25.0)	10(47.6)
物	9(56.2)	9(47.4)	10(52.6)	14(73.6)	15(75.0)	9(42.9)
身 体	0(0)	0(0)	1(5.3)	0(0)	5(25.0)	2(9.5)
物・身 体	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total	16	19	19	19	25	21

()内百分率

Table T—15 verbalなTのCに対する働きかけ方の頻数とその百分率

期 働きかけ方	第1—A期	第1—B期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
単	13(65.0)	23(76.7)	8(80.0)	6(42.9)	10(71.4)	19(82.6)
物	7(35.0)	7(23.3)	2(20.0)	8(57.1)	2(14.3)	1(4.4)
身 体	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(14.3)	3(13.0)
物・身 体	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total	20	30	10	14	14	23

()内百分率

Table T—16 TのCに対する働きかけ方^{*}の頻数とその百分率

期 働きかけ方	第1—A期	第1—B期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
単	24(47.1)	33(60.0)	16(51.6)	11(29.7)	18(37.5)	32(61.5)
物	27(52.9)	22(40.0)	14(45.2)	26(70.3)	23(47.9)	14(26.9)
身 体	0(0)	0(0)	1(3.2)	0(0)	7(14.6)	6(11.5)
物・身 体	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total	51	55	31	37	48	52

()内百分率、* ;ブレンドを含む

Table T-17 behavioral なCの働きかけに対するTの反応の頻数とその百分率

Tの反応		期		第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期		
有				5(41.7)	3(23.1)	9(69.2)	10(71.4)	10(66.7)	7(70.0)		
無	物	7(58.3)	0/7	10(76.4)	0/10	4(30.8)	0/4	4(28.6)	0/5	3(30.0)	0/3
	無										
Total				12	13	13	14	15	10		

() 内 百分率

Table T-18 verbal なCの働きかけに対するTの反応の頻数とその百分率

Tの反応		期		第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期		
有				10(100)	10(71.4)	14(73.7)	16(94.1)	8(100)	9(100)		
無	物	0(0)	0/0	4(28.6)	0/4	5(26.3)	0/5	1(5.9)	0/0	0(0)	0/0
	無										
Total				10	14	19	17	8	9		

() 内 百分率

Table T-19 Cの働きかけに対するTの反応の頻数とその百分率 (Total)

Tの反応		期		第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期		
有				17(70.8)	17(51.5)	26(74.3)	29(85.3)	20(80.0)	17(85.0)		
無	物	7(29.2)	0/7	16(48.5)	0/16	9(25.7)	0/9	5(14.7)	0/5	3(15.0)	0/3
	無										
Total				24	33	35	34	25	20		

() 内百分率, * ;ブレンドを含む

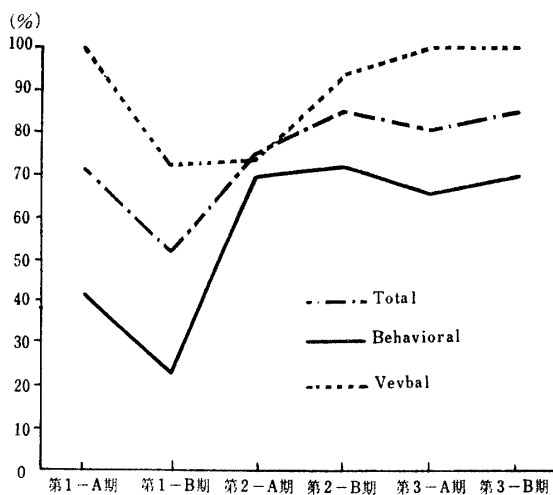


Fig. T-7 Cの働きかけに対するTの「反応有り」についての百分率

(2-h) Cの働きかけに対するTの反応の頻数とその百分率を Table T-17~ Table T-19 に示し, 更に「反応有り」についてのみ Fig. T-7 に図示した。

これらにより, 第1期より第3期にかけて反応有りが徐々に増加している傾向が認められる。

(3) 次に, Cについての分析, 検討をしていく事にする。

(3-a) CABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を Table T-20 に示し, 更にその中でサブカテゴリー「II弱い働きかけ」における百分率を Fig. T-18 に図示した。

これらにより, イ) 全体として第1期に比べ, 第2期及び第3期における減少の傾向が認められる, ロ) サブカテゴリー「II弱い働きかけ」は, 第1期より第3期にかけて徐々に増加している傾向が認められる。

自閉症に関する研究

Table T-20

CABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 働きかけ		9(18.8)	10(23.8)	9(22.5)	9(25.0)	8(18.6)	2(6.7)
II 弱い働きかけ		3(6.3)	3(7.1)	4(10.0)	5(13.9)	7(16.3)	8(26.7)
III 身体的働きかけ		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
IV 物への働きかけ		32(66.7)	28(66.7)	26(65.0)	22(61.1)	28(65.1)	19(63.3)
V 感情表現		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
VI 無目的的行動		4(8.3)	1(2.3)	1(2.5)	0(0)	0(0)	1(3.3)
Total		48(72.7)*	42(60.9)*	40(54.8)*	36(55.4)*	43(54.4)*	30(52.6)*
Cのサンプル数		66	69	73	65	79	57

() 内百分率, * ; Cのサンプル数に対する百分率

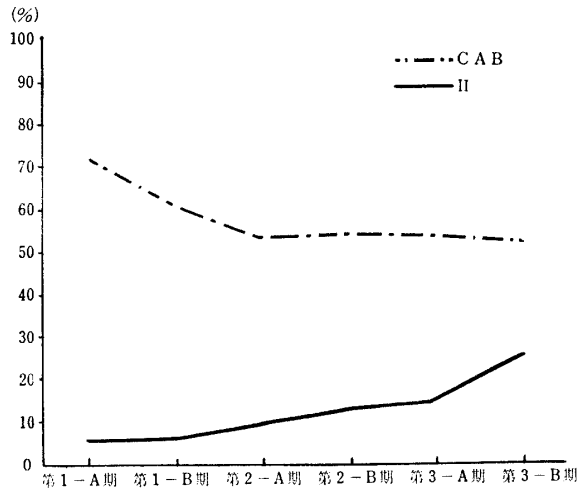


Fig. T-8 CABのサブカテゴリー (II) における百分率

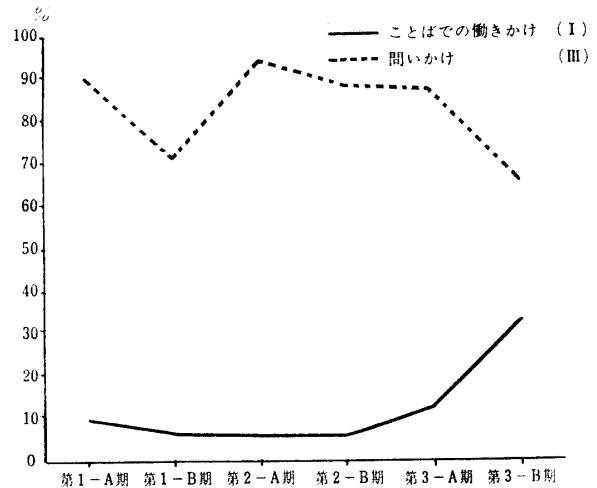


Fig. T-9 CAVのサブカテゴリー (I, III) における百分率

Table T-21

CAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 言葉での働きかけ		1(10.0)	1(7.1)	1(5.3)	1(5.6)	1(12.5)	3(33.3)
II 言葉での弱い働きかけ		0(0)	3(21.4)	0(0)	1(5.6)	0(0)	0(0)
III 問いかけ		9(90.0)	10(71.4)	18(94.7)	16(88.9)	7(87.5)	6(66.7)
IV 言葉での身体接触の要求		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total		10(15.2)*	14(20.3)*	19(26.0)*	18(27.7)*	8(10.1)*	9(15.8)*
Cのサンプル数		66	69	73	65	79	57

() 内百分率, * ; Cのサンプル数に対する百分率

(3-b) CAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率 Table T-21 に示し, 更にその中で, サブカテゴリー「I 言葉での働きかけ」と「III 問いかけ」にお

ける百分率を Fig. T-9 に図示した。

これらにより, イ) 全体として, 第1期, 第3期に比べて, 第2期におけるCAVの増加の傾向が認められ

る。ロ) Fig. T-9 より, サブカテゴリー「I 言葉での働きかけ」は, 第1期, 第2期に比べて, 第3期において増加し, 逆に「III 問いかけ」は, 第3期において減少している傾向が認められる。
(3-c) CPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を Table T-22 に示した。

Table T-22 CPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 従 属		0(0)	0(0)	3(60.0)	0(0)	1(6.3)	2(28.6)
II 模 倣		0(0)	0(0)	0(0)	1(16.7)	0(0)	1(14.3)
III 拒 否		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(12.5)	0(0)
IV 応 答		3(100)	1(100)	2(40.0)	5(83.3)	13(81.3)	4(57.1)
Total		3(4.6)*	1(1.5)*	5(6.9)*	6(9.2)*	16(20.3)*	7(12.3)*
Cのサンプル数		66	69	73	65	79	57

() 内百分率, * ; Cのサンプル数に対する百分率

Table T-23 CPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

サブカテゴリー	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 応 答		3(100)	4(100)	4(100)	1(100)	2(100)	10(100)
II 言葉での拒否		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total		3(4.6)*	4(5.8)*	4(5.5)*	1(1.5)*	2(2.5)*	10(17.5)*
Cのサンプル数		66	69	73	65	79	57

() 内百分率, * ; Cのサンプル数に対する百分率

Table T-24 Cの behavioral* カテゴリーにおける頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
C A B	48(75.0)	42(68.9)	40(58.8)	36(65.5)	43(62.3)	30(53.6)
C P B	3(4.7)	1(1.6)	5(7.4)	0(0)	16(23.2)	7(12.5)
Total	51(79.7)	43(70.5)	45(66.2)	36(65.5)	59(85.5)	37(66.1)
behavioral** + verbal	73	80	85	76	63	59

() 内百分率, * ; CAB+CPB, ** ; CAB+CPB+CAV+CPV

Table T-25 Cの verbal* カテゴリーにおける頻数とその百分率

期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
C A V	10(15.6)	14(23.0)	19(27.9)	18(32.7)	8(11.6)	9(16.1)
C P V	3(4.7)	4(6.6)	4(5.9)	1(1.8)	2(2.9)	10(17.9)
Total	13(20.3)	18(29.5)	23(33.8)	19(34.5)	10(14.5)	19(33.9)
behavioral** + verbal	73	80	85	76	63	59

() 内百分率, * ; CAV+CPV, ** ; CAV+CPV+CAB+CPB

自閉症に関する研究

これにより、イ) 全体として、第1期及び第2期に比べて、第3期においてCPBの増加している傾向が認められる、ロ) 「従属」は、わずかではあるが第2期から現われている、ハ) 「応答」は、頻数からみていくと、第1期、第2期に比べて、第3期に増加している傾向が認められる。

(3-d) CPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率をTable T-23に示した。

これによると、CPVの頻数そのものがすくなく、顕著な傾向は認められていない。

(3-e) Cのbehavioral及びverbalのカテゴリー

における頻数とその百分率をTable T-24及びTable T-25に示し、更に両者のTotalの百分率をFig. T-10に図示した。

ここにおいて、イ) Table T-25より、第1期及び第3期に比べ、第2期におけるverbalの増加の傾向が認められ、それは(3-b)において前述した如く、CAVにおいて顕著に認められる、ロ) Fig. T-10より、第3-A期においては、他の期に比べて、behavioralが増加し、verbalが減少している、ハ) 逆に、第2-A期、第2-B期、第3-B期においては、他の期に比べて、verbalが増加し、behavioralが減少している

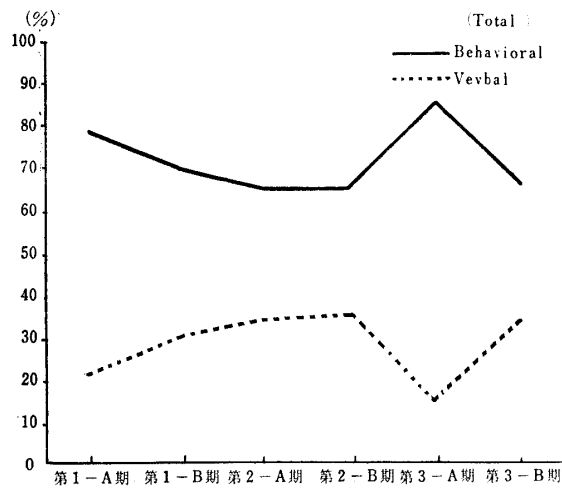


Fig. T-10 Cのbehavioralとverbalの百分率

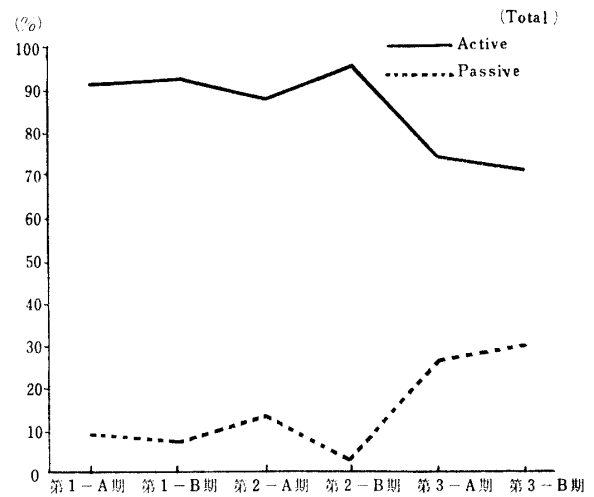


Fig. T-11 Cのactiveとpassiveの百分率

Table T-26

Cのactive*カテゴリーにおける頻数とその百分率

	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
C A B	48(72.7)	42(62.7)	40(56.3)	36(61.0)	43(60.6)	30(52.6)
C A V	10(15.2)	14(29.8)	19(26.8)	18(30.5)	8(11.3)	9(15.8)
Total	60(90.9)** (2)***	62(92.5)** (6)***	62(87.3)** (3)***	47(96.6)** (3)***	53(74.7)** (2)***	40(70.2)** (1)***

()内百分率、* ; CAB+CAV+Cのactiveブレンド、** ; Cのactive+passive、*** ; Cのactiveブレンド

Table T-27

Cのpassive*カテゴリーにおける頻数とその百分率

	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
C P B	3(4.6)	1(1.5)	5(7.0)	0(0)	16(22.5)	7(12.3)
C P V	3(4.6)	4(6.0)	4(5.6)	1(1.7)	2(2.8)	10(17.5)
Total	6(9.1)** (0)***	5(7.5)** (0)***	9(12.7)** (0)***	2(3.4)** (1)***	18(25.3)** (0)***	17(29.8)** (0)***

()内百分率、* ; CPB+CPV+Cのpassiveブレンド、** ; Cのactive+passive、*** ; Cのpassiveブレンド

傾向が認められる。

(3-f) Cの active 及び passive のカテゴリにおける頻数とその百分率を Table T-26及び Table T-27に示し、更に両者のTableにおける百分率を Fig. T-11に図示した。

ここにおいて、Fig. T-11 により、第1期及び第2期に比べ、第3期においては、active が減少し、逆に passive が増大している傾向が認められる。

(3-g) Tの働きかけに対するCの反応の頻数とその百分率を Table T-28 に示し、更にそれを Fig. T

12に図示した。これにより、Cの反応有りは、他の期に比べて、第3期において比較的増加し、反応無しは減少している傾向が認められる。

(3-h) Tの働きかけに対するCの active と passive な反応の頻数とその百分率を Table T-29 に示し、更にそれを Fig. T-13に図示した。

これにより、第1期、第2-A期においては active な反応をより多くしているが、第3期においては、逆に passive な反応がより多くなっている傾向が認められる。

Table T-28 Tの働きかけに対するCの反応の頻数とその百分率*

Cの反応		期		第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
有				18(35.3)	16(29.1)	11(35.5)	16(43.2)	22(46.8)	20(42.6)
無	物	無		33(64.7)	39(70.9)	20(64.5)	21(56.8)	25(53.2)	27(57.4)
				16/23	10/29	8/12	8/13	9/16	6/21
Total				51	55	31	37	47	47

() 内百分率, * ; ブレンドを含む

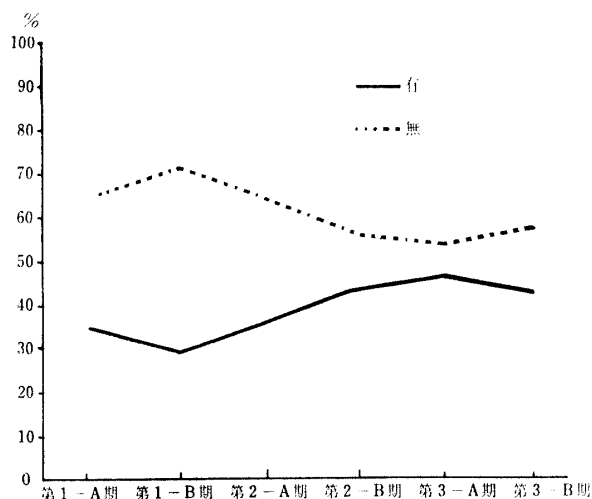


Fig. T-12 Tの働きかけに対するCの反応の百分率

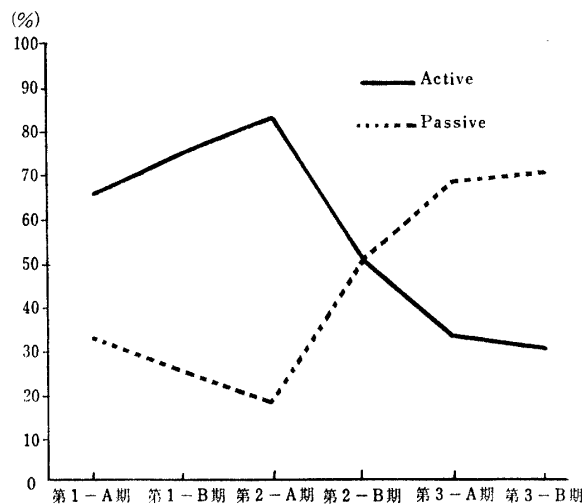


Fig. T-13 Cのactiveとpassiveな反応の百分率

Table T-29 Cの active と passive な反応の頻数と百分率

Cの反応		期		第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
active				12(66.7)	12(75.0)	9(81.8)	8(50.0)	7(31.8)	6(30.0)
passive				6(33.3)	4(25.0)	2(18.2)	8(50.0)	15(68.2)	14(70.0)
Total				18	16	11	16	22	20

() 内百分率

自閉症に関する研究

Table T-30 behavioral な働きかけに対するCの反応の頻数とその百分率

Cの反応		期		第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期				
有				2(12.5)	4(21.1)	4(21.1)	8(42.1)	8(33.3)	2(12.5)				
無	物	14(87.5)	4	15(78.9)	1	15(78.9)	4	11(57.9)	5	16(66.7)	6	14(87.5)	3
	無		10		14		11		6		10		11
Total				16	19	19	19	24	16				

() 内 百分率

Table T-31 verbal な働きかけに対するCの反応の頻数とその百分率

Cの反応		期		第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期				
有				9(45.0)	10(33.3)	5(50.0)	8(57.1)	10(71.4)	11(47.8)				
無	物	11(55.0)	4	20(66.7)	7	5(50.0)	4	6(42.9)	1	4(28.6)	2	12(52.2)	3
	無		7		13		1		5		2		9
Total				20	30	10	14	14	23				

() 内 百分率

(3-i) Tの behavioral 及び verbal な働きかけに対するCの反応の頻数とその百分率を Table T-30 及び Table T-31 に示した。

これらにより、Cの反応有りの割合は、behavioral な働きかけに対する場合に比べ、verbal な働きかけに

対する場合の方がより大きい事が示されている。

(4) T-Cの interactionの頻数について、Table T-32に示した。これによると、interactionの連続した数においても、その延べ頻数にしても、各期における変化は認められないと言える。

Table T-32 T-C の interaction の 頻 数

頻数	期	第1-A期	第1-B期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
1		10	5	5	6	16	9
2 ~ 4		6	7	2	7	4	3
5 ~ 8		0	2	3	3	1	2
延べ頻数		22	32	30	41	30	30

4. 考 察

以上述べてきた結果にもとづき、若干の考察を行なっていきたい。(以下において()内に示す記号は、結果の項において示してきた記号を表わしている。

(1) 第2期において、他の期と比べ、Cの verbal の増加がより顕著に示されており、それは特にCAVにおいて著しいという傾向が示された(3-b, 3-e)。更に、Tにおいては、第2期におけるTPVの顕著な増加がみられ、TAVではむしろ第1期及び第3期に比べて第2期における減少という傾向が示された(2-b, 2-d)。

以上の結果は、他の期と比べて、第2期において、T-C間の接触が、より言葉に依存した形でなされていた

のではないかという事を示しているといえよう。この点に関しては、前回のレポート(丸井他, 1970)におけるまとめの中で、第2期において“言語レベルでの表面的なかかわり合いが多くみられるようになった”と述べられている点と比較的一致していると考えられるように思われる。

もう少し細かくみていくと、T, C共に第2-B期、第3-B期においては、他の期と比べて、verbalが増加し、behavioralが減少している傾向が示された(2-e, 3-e)。

一方、第3-A期においては、逆にbehavioralが増加し、verbalが減少している傾向が示された(2-e, 3-e)。これは、第2-B期においてT-C間の

言葉を用いての接触が増加し、それが第3—B期において減少していったと考えられよう。

(2) (2—i) 他の期に比べ、第3期において、Cにおける active が減少し、passive が増加している傾向が示された(3—f)。この事は、CABにおける第3期での減少の傾向、CPBにおける第3期での増加の傾向といった事からも示されてきた(3—a, 3—c)。

また、Tの働きかけに対するCの反応においても、第3期において passive な反応がより増加しており、他の期とは逆の傾向が示された(3—h)。

他方、Tにおいては、第3期において active の増加の傾向が示されたのである(2—f)。

(2—ii) T、Cの場合共に、他の期と比べ、第3期において働きかけに対する反応有りの割合が増加している傾向が示された(2—h, 3—g)。

(2—iii) CABにおいて、サブカテゴリーII「弱い働きかけ」が、他の期に比べて第3期において増加してきており、CAVにおいても、わずかではあるが第3期においてサブカテゴリー「I言葉での働きかけ」が増加し、逆にサブカテゴリー「III問いかけ」が減少している傾向が示された(3—a, 3—b)。さらにCPBにおいても、「応答」が第3期において増加してきている傾向が示された(3—c)。

以上の(2—i), (2—ii), (2—iii)において示された如く、第3期において種々の変化がみられたと言える。このような変化は、第1期及び第2期に比べて、第3期において、T—C間の交流がよりスムーズに、より適切にもつ事ができるようになった事を表わしていると言いうるのであろう。この事は、前回のレポートにおいて、第3期に“セラピストとの関係の深まり”がみられたと述べられている事とある程度一致しているであろう

と考える。

しかしながら、他方 interaction の量的な差異が各期の変化のなかで認められなかったのは何故であろう。

(4) 本児は、感情表現があまり伴われていないのであるが、一応のことばを持っており、どうしても言葉に頼った形での接触を持ちやすいと言える。この事は、Cの反応の割合が behavioral によるものよりも verbal によるものの方がより多いという事からも明らかであろう(3—i)。更に、動きの幅の狭さはみられパターン化した動きが多いのであるが、第1—A期から遊具を媒介にしての遊びは十分できてきており、遊具への関心もあり自発的な動きも比較的にみられていたと言える。

こうした本児のもつ特性によって、T—C間の接触に関してVTRを通してといった外枠から眺めた時は、Cの側からの一方的なくりかえしの言葉での働きかけや、遊具への関心が次々に変化して動きまわっている時には、T—Cの相互作用はもたれていないとされてしまう事が多くあったのではないかと考えられるであろう。

また、第1—A期から、T—Cの間には、表面的ではあるが一応の相互作用がもたれてきており、そこでの相互作用の量的な差はあまりみられず、むしろ質的な変化といった事に若干ではあるが違いがみとめられるようにも思う。(加藤義男, 沼尾孝平, 園田紀子)

5. 事例「大〇登」の結果と考察

本児は前報告において、事例6として報告したケースである。以下セラピスト(以後Tと略述する)、クライアント(以後Cと略述する)、T—C関係(interaction)について順に結果と考察を述べていく。

(1) セラピストに関して

Table 0—1 TABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

TABのサブカテゴリー \ 期	第1期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
I 働きかけ	2(16.7)	2(4.0)	0(0)	9(75.0)	7(63.4)
II 弱い働きかけ	5(41.7)	0(0)	1(33.3)	0(0)	2(18.2)
III 身体的働きかけ	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(9.1)
IV 物への働きかけ	5(41.7)	3(6.0)	2(66.7)	2(16.6)	1(9.1)
V 感情表現	0(0)	0(0)	0(0)	1(8.8)	1(9.1)
Total	12(18.5)*	5(7.6)*	3(3.9)*	12(12.5)*	11(14.5)*
Tのサンプル数	65	66	89	96	76

カッコ内はパーセント、* ; Tのサンプル数に対する百分率

自閉症に関する研究

Table O—1は、TABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を各期ごとにみたものである。これを見るとTの active behavior は、相対的にも絶対的にも少ない。Tのサンプル数に比して第2—B期では、頻数3、百分率3.9%、最も多いところでも第1期で、頻数12、百分率18.5%のように期の変遷に伴うTABの顕著な変化は見られない。第2期が他期に比して頻数、百分率いづれもTのサンプル数に対し占める割合が低くなっている。TABのサブカテゴリーをみると、TABは大体「I働きかけ」「IV物への働きかけ」この2つのカテゴ

リーによって占められている。「I働きかけ」に於て、第3期にかなり頻数が増加している点が意味をもっているのではないと思われる。即ち本児の場合の遊戯治療状況に於てTABは非常に少なく第3期に入ってTの働きかけが増すということは、T側の要因なのか、C側の要因なのか、あるいは両者の要因なのかという点が問題になる。この問題は他のカテゴリーとも合わせて考察することによって明確にできると思われるので、後で取り上げよう。全体的には、カテゴリー間でTABの占める割合が低いのが特徴であろう。

Table O—2 TAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

TAVのサブカテゴリー \ 期	第1期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
I 言葉での働きかけ	3(25.0)	2(9.1)	1(4.8)	6(20.6)	0(0)
II 言葉での弱い働きかけ	0(0)	1(4.6)	1(4.6)	1(3.5)	1(6.3)
III 問いかけ	9(75.0)	19(86.3)	19(90.6)	22(75.9)	15(93.7)
Total	12(18.5)*	22(33.3)	21(23.6)	29(30.2)	16(21.1)
Tのサンプル数	65	66	89	96	76

()内は百分率、* ; Tのサンプル数に対する百分率

Table O—2は、TAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を示している。Tのサンプル数に対して各期の合計の比率をみると最も小さい第1期で頻数12、百分率18.5%、最も高い第2—A期で頻数22、百分率33.3%と各期を通じて20%~30%占めている。TABと同様に、期の変遷に伴うTAVの著しい変化は見られない。TAVのサブカテゴリーをみると「III問いかけ」が各期を通じて75%~94%占めていることより、TAVはほとんど「III問いかけ」によって占められていることが分る、こ

のサブカテゴリー「III問いかけ」は、百分率に於て第1期より第3—Bに変遷するにつれて高くなっている。第3—A期で、やや低くなるが。しかしながら頻数に於てはやや多くなっているが、それほど顕著ではない。このサブカテゴリーは内容的にはT—C関係に於て重要なサブカテゴリーであり、後で分析しよう。TABとTAVを比較してみると、Tの active というレベルでは第1期を除いてはるかに verbal が優位を占めている。

Table O—3は、TPBのサブカテゴリーにおける頻数

Table O—3 TPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

TPBのサブカテゴリー \ 期	第1期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
I 従属	0(0)	0(0)	0(0)	2(40.0)	12(70.6)
II 模倣	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
III 態度での容認	1(50.0)	1(25.0)	14(93.3)	1(20.0)	0(0)
IV 後追い	1(50.0)	3(75.0)	1(6.7)	2(40.0)	4(23.5)
V 拒否	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(5.9)
Total	2(3.1)*	4(6.1)*	15(16.9)*	5(5.2)*	17(22.4)*
Tのサンプル数	65	66	89	96	76

()内は百分率、* ; Tのサンプル数に対する百分率

とその百分率を示している。Tのサンプル数に対する各期の合計の比率をみると、第2—B期16.9%、第3—B期22.4%、残りの期は4%前後の値である。高値を示した第2—B期では、サブカテゴリー「Ⅲ態度での容認」に於て14の頻数があり、第3—B期では「Ⅰ従属」で12の頻数があった。その為他期に比して高くなったのである。「Ⅰ従属」、「Ⅲ態度での容認」にしても急に、非連続に第2—B期、第3—B期に出現しており、これは、Cの遊びの種類に関係していると思われるが、いずれにしても、これらのサブカテゴリーがあることは、T—C間のつながりを示すものであり、第1期、第2—A期即ち治療の前半にみられなかった、困難であったつながりが2—B期以降かなり増加していることを予想させる。TPB全体に関しては、上述の2つの期を除いてTのサンプル数の占める割合は、きわめて低い。

Table O—4は、TPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を示している。Tのサンプル数に対する各期の合計の比率は第1期より第3—A期まで徐々にではあるが増加している(41.5%→51.1%)。第3—B期で減少するが、頻数を見ると、第1期と第2—A期は、27、28であるが、第2—B期、第3—A期では、40、49と急激に増加している。第3—B期で再び減少している。このように頻数、百分率いずれも期の変遷とともに増加している。第3—B期を除いて、TPVのサブカテゴリー

をみると「Ⅲ応答・受容」が圧倒的な割合を占めている。また第2—A期と第2—B期に於て合計の頻数と百分率を比較してみると、百分率には余り変化がないが、頻数に於てかなりの差があることは、単位時間あたりのサンプル数の増加を意味している。いずれにしても第2—A期と第2—B期の間に一線を画すことができるのではないかと思う。

Table O—5は、Tのbehavioralとverbalの頻数とその百分率を示したものであり、Fig.0—1、Fig.0—2は、それぞれ百分率及び頻数を図に示したものである。Fig.及びTableを見て分るようにTのactionは圧倒的にverbalがドミナントである。また第3—Bを除いて、verbalとbehavioralの比率はほとんど一定している。次に10分間のTのサンプル数をみると第1期から第3—A期までかなり増加しており、第3—A期は、第1期に比較すると約2倍にもなっている。この増加傾向はbehavioralでは、余りみられないが、verbalに顕著に示されている。TAVの変化は、余りなかったようにこの増加の主な要因はTPVの増加に求められる。このことは要するにCのverbalでのTへの働きかけが多くなってきたことを裏づけるものであろう。後にCの分析の際この点に言及することにする。また第3—B期は、それ以前に比して様子が異っておりC側の要因と合わせて後で触れたい。

Table O—4 TPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

TPVのサブカテゴリー	期	第1期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
I 従属		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
II 言葉での容認		1(3.7)	6(21.4)	0(0)	2(4.1)	0(0)
III 応答・受容		26(96.3)	22(78.6)	40(100)	47(95.9)	30(100)
IV 拒否		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total		27(41.5)*	28(42.4)*	40(44.9)*	49(51.1)*	30(39.5)*
Tのサンプル数		65	66	89	96	76

()内は百分率、* ; Tのサンプル数に対する百分率

Table O—5 Tのbehavioralとverbalの頻数とその百分率

	期	第1期	第2—A期	第2—B期	第3—A期	第3—B期
behavioral		14(26.4)	9(15.3)	18(22.9)	17(17.9)	28(37.8)
verbal		39(73.6)	50(84.8)	61(77.2)	78(82.1)	46(62.2)
Total		53	59	79	95	74

()内は百分率、* ; behavioral TAB+TPB, verbal TAV+TPV

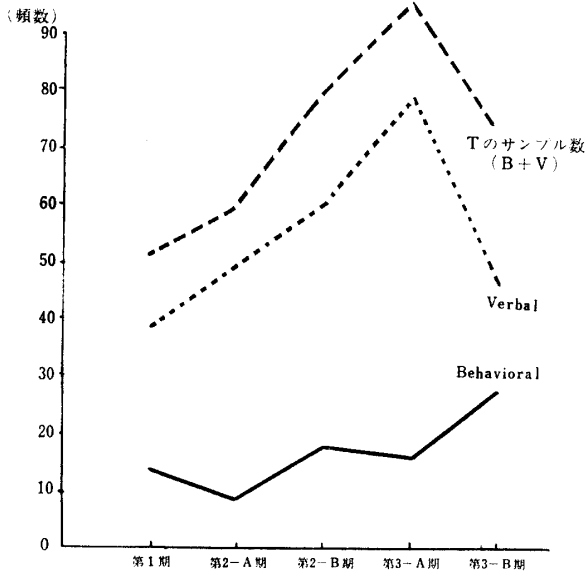


Fig. 0-2 Tのbehavioralとverbalの頻数

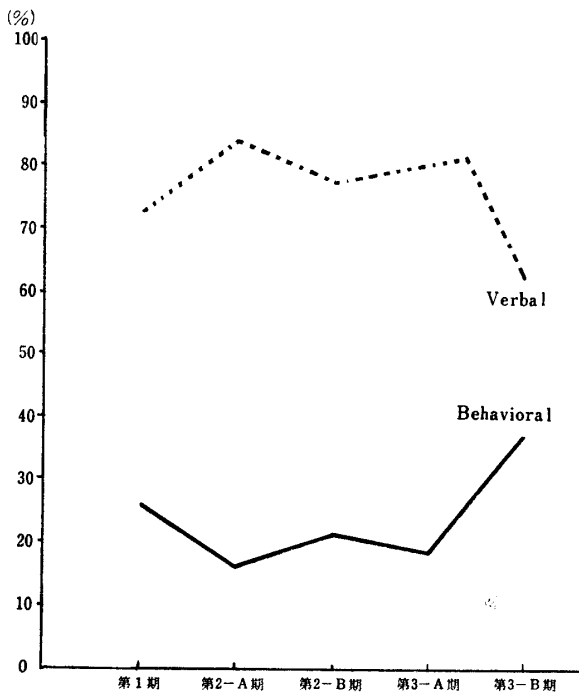


Fig. 0-1 Tのbehavioralとverbalの百分率

Table O-6は、Tのactiveとpassiveの頻数とその百分率である。Fig.O-3, Fig.O-4 はそれぞれ百分率と頻数を示している。百分率で見ると第1期及び第2-A期では、activeとpassiveは、ほとんど同じ割合を示しているが、第2-B期より明確に分れ、activeは減少傾向に、passiveは増加傾向にある。頻数に於ては、activeで、ほとんど変化はないがpassiveにかなりの増加がみられる。このように第2-B期よりこのような変化をもたらした要因としては、behavioralとverbalとの比較と同時にTPVの増加に求められる。

以上セラピストについて考察してきたが、次の点が大体明らかにされると思う。

1) 各期を通じてTの動き(TAB, TAV, TPB, TPV)の割合には、大きな変化はみられない。最も多く占めているカテゴリーから順に並べるとTPV→TAV→TPB→TABとなり、behavioralよりverbalが圧倒的にドミナントである。

2) Tのpassiveの傾向が強くなり、逆にactiveの傾向は、第2-B期より弱くなっている。

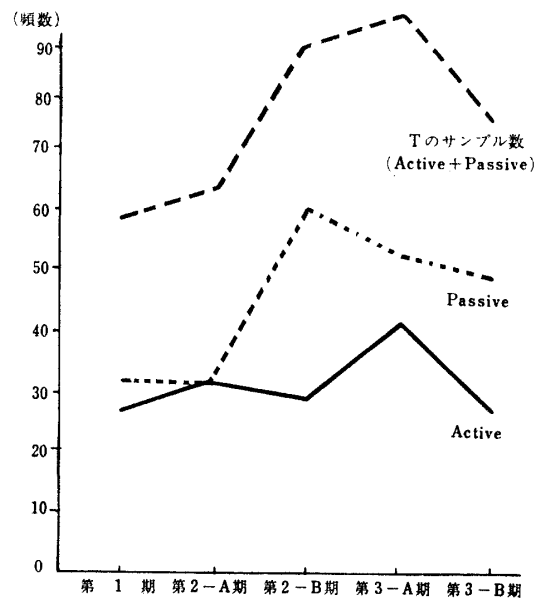


Fig. 0-4 Tのactiveとpassiveの頻数

Table 0-6 Tのactiveとpassiveの頻数とその百分率*

期	第1期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
active	27(45.8)	32(50.0)	29(32.6)	42(43.8)	27(36.0)
passive	32(44.2)	32(50.0)	60(67.4)	53(56.2)	48(64.0)
Total	59	64	89	95	75

()内は百分率, * ; active TAB+TAV, passive TPB+TPV

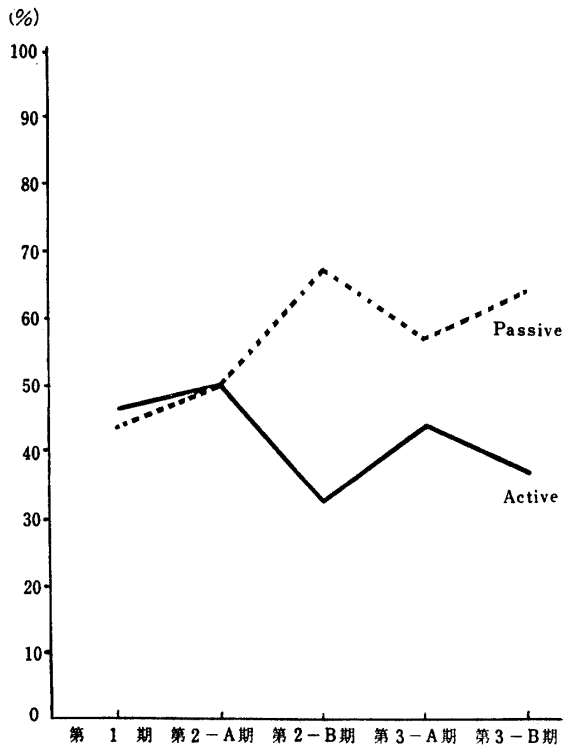


Fig. 0-3 Tの active と passive の百分率

3) Tの aehavioral と verbal の傾向は大体一定であるが verbal レベル特にTPVの頻数の増加が著しい。

(2) クライアントに関して

Table 0-7は、CABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を表わしている。Cのサンプル数に対する各期の合計の比率をみると第1期から第2-A期へかけては増加しているが第2-A期から第3-B期へは減少している。頻数からみると特殊な傾向は無いが第3-A期まではやや増加の傾向にある。CABのサブカテゴリーをみると、「I働きかけ」、「IV物への働きかけ」によって大体占められている。「I働きかけ」と「IV物への働きかけ」の割合は各期ともほとんど同じであるが、第2-B期のみ逆転している。(1)セラピストについてのところで述べたように、第2-B期よりサンプル数が増し、何等かのCの働きかけが予想されたが、CAB、「I働きかけ」が第2-B期よりそれ以前に比してかなり増していることはそれを物語っているのではないか。CABは、Cの active の中で占める割合は40%~50%とかなり高いことを表わしている。

Table 0-7 CABのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

CABのサブカテゴリー	期				
	第1期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 働きかけ	0(0)	3(8.6)	21(70.0)	8(17.4)	6(22.2)
II 弱い働きかけ	5(22.8)	1(2.9)	0(0)	1(2.2)	1(3.7)
III 身体的働きかけ	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(3.7)
IV 物への働きかけ	16(72.7)	26(74.3)	9(30.0)	36(78.3)	19(70.4)
V 感情表現	1(4.6)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
VI 無目的的行動	0	5(14.3)	0(0)	1(2.2)	0(0)
Total	22(39.5)*	35(50.0)*	30(42.3)*	46(39.0)*	27(32.5)*
Cのサンプル数	56	66	71	117	83

() 内 百分率, * ; Cのサンプル数に対する百分率

Table 0-8は、CAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を示している。Cのサンプル数に対する各期の合計の比率を見ると、明確に第1期から第3-B期まで増加している(25.0%→56.6%)。また頻数に於てもほとんど同様の傾向を示している。サブカテゴリーをみると第1期から第3-A期まで「III問いかけ」によってほとんど占められているが、第3-B期に入って「I言葉での働きかけ」が頻数14で急に増している。このサブカテゴリーIは、CからTへの働きかけの最も強い水準のも

のであり、これが第3-B期で出てきたことはCのかなりの変化といえる。とに角、期の変遷と共にCAVの急激な増加が、本児にとって最も特徴となる点である。

Table 0-9は、CPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を示したものであるが、このカテゴリーのCのサンプル数に対して占める割合はきわめて少なく、第2-A期で頻数1,百分率1.4%,最も高く第3-A期で頻数6,百分率5.1%と、本児の遊戯治療状況の中では、ほとんどみられないことを示している。これを裏

自閉症に関する研究

Table 0-8 CAVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

CAVのサブカテゴリー	期	第1期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 言葉での働きかけ		1(7.1)	0(0)	0(0)	1(2.0)	14(29.8)
II 言葉での弱い働きかけ		0(0)	2(8.0)	0(0)	0(0)	1(2.1)
III 問いかけ		13(92.9)	23(92.0)	33(100.0)	51(98.0)	32(68.1)
IV 身体接触の要求		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
Total		14(25.0)*	25(37.9)*	33(46.5)*	52(44.1)*	47(56.6)*
Cのサンプル数		56	66	71	117	83

()内百分率, * ; Cのサンプル数に対する百分率

Table 0-9 CPBのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

CPBのサブカテゴリー	期	第1期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 従属		0(0)	0(0)	3(100.0)	0(0)	0(0)
II 模倣		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
III 拒否		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
IV 応答		0(0)	1(100.0)	0(0)	6(100.0)	0(0)
Total		0(0)*	1(1.4)*	3(4.2)*	6(5.1)*	0(0)*
Cのサンプル数		56	66	71	117	83

()内百分率, * ; Cのサンプル数に対する百分率

Table 0-10 CPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率

CPVのサブカテゴリー	期	第1期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
I 応答		10(90.9)	5(100.0)	4(80.0)	13(100.0)	7(87.5)
II 拒否		1(9.1)	0(0)	1(20.0)	0(0)	1(22.5)
Total		11(19.6)*	5(7.1)*	5(7.0)*	13(11.0)*	8(9.6)*
Cのサンプル数		56	66	71	117	83

()内百分率, * ; Cのサンプル数に対する百分率

返せば, TのCに対する active な働きかけが少ないことと同時に, 本児がT及び他児から働きかけられても, それに従うことができない状態にあることを示している。

表0-10は, CPVのサブカテゴリーにおける頻数とその百分率を示している。CPBと同様にCのサンプル数に対する各期の合計との比率を見ると全般的に低く, 最も高い値で第1期の頻数11, 百分率19.6%, 最も低い値で第2-B期で頻数5, 百分率7.0%である。サブカ

テゴリーは, ほとんど「I 応答」で占められている。先のCPBと合わせて考えるとCの passive な action は active な action に比較してきわめて少ないことが分る。

Table 0-11は, Cのbehavioral と verbal の頻数とその百分率である。Fig.0-5, Fig.0-6は, それぞれ百分率, 頻数を図に表わしたものである。Cのbehavioral は, ほとんどが active であるが, passiveも合わせてみると第1期から第3-B期にかけて明確に behavioral

Table 0-11 Cの behavioral と verbal の頻数とその百分率

期	第 1 期	第 2-A 期	第 2-B 期	第 3-A 期	第 3-B 期
behavioral	22(46.8)	36(54.6)	33(46.5)	52(44.4)	27(32.9)
verbal	25(53.2)	30(45.4)	38(53.5)	65(55.6)	55(67.1)
Total	47	66	71	117	82

() 内 百分率

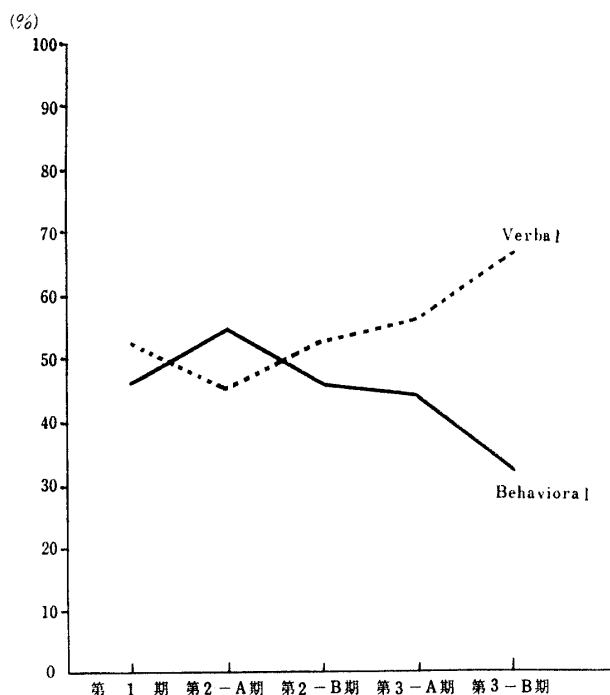


Fig. 0-5 Cの behavioral と verbal の百分率

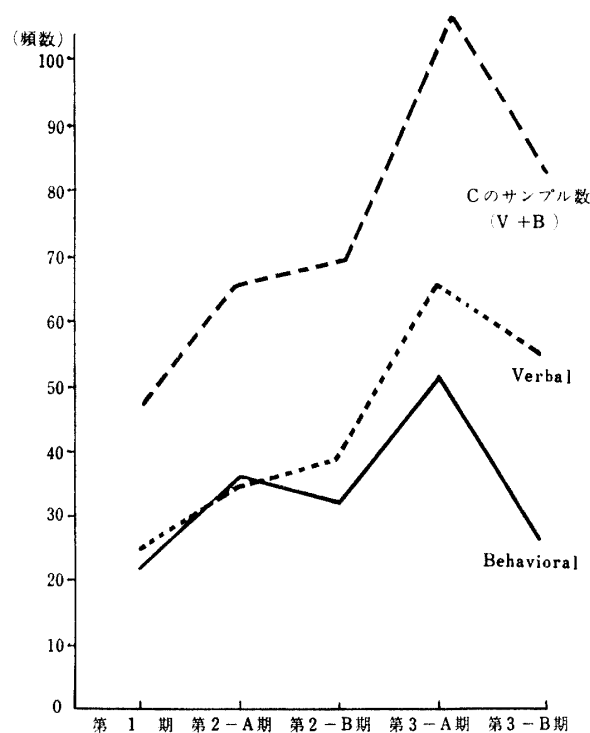


Fig. 0-6 Cの behavioral と verbal の頻数

Table 0-12 Cの active と passive の頻数とその百分率

期	第 1 期	第 2-A 期	第 2-B 期	第 3-A 期	第 3-B 期
active	45(80.4)	60(90.9)	63(88.7)	98(83.1)	75(91.5)
passive	11(19.6)	6(9.1)	8(11.3)	19(16.9)	8(8.5)
Total	56	66	71	117	83

() 内 百分率

の占める割合が減少している。一方逆に verbal が顕著に増加している。頻数をみると behavioral も verbal も同様に増加しているが、増加率が verbal の方がかなり高い為に百分率で差が出てくるのである。

Table 0-12は、Cの activeと passive の頻数とその百分率を示している。Fig.0-7, Fig.0-8は、それぞれ百分率と頻数を図に表わしたものである。Table 及び Fig.

を見て明白なように、Cの action の中で active の占める割合は、第1期で80.4%、第2-A期以降は90%前後を占めている。逆に passive の割合は、各期を通じて10%~20%ときわめて低い。頻数を見ると passive は余り変化しないが、active は着実に増加している。

以上クライアントについて結果をみてきたが、次の点がいえるであろう。

自閉症に関する研究

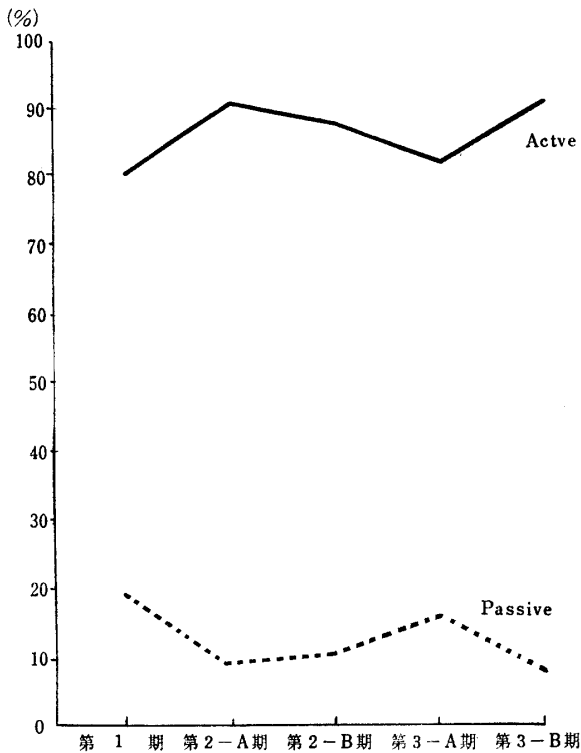


Fig. 0-7 Cの active と passive の百分率

1) Cのサンプル数に対しカテゴリーの占める割合は、第1期より第2-A期までは、CAB→CAV→CPV→CPBとなっているが、第2-B期から第3-B期までCAV→CAB→CPV→CPBとなる。つまり、第2-B期よりCAVとCABの順位が入れ替るのである。Tの場合は verbal 優位という特徴であったが、Cの場合 active の優位となる。もう少し言及すれば、Tは、passive verbal 優位、Cは、active verbal 優位といえる。

2) verbal と behavioral に於て単位時間あたりの頻数は増加しているが、第2-B期より verbal の増加が伸びる。それが明確になる為には第3期まで待たねばならない。

3) active と passive に於て単位時間あたりの頻数

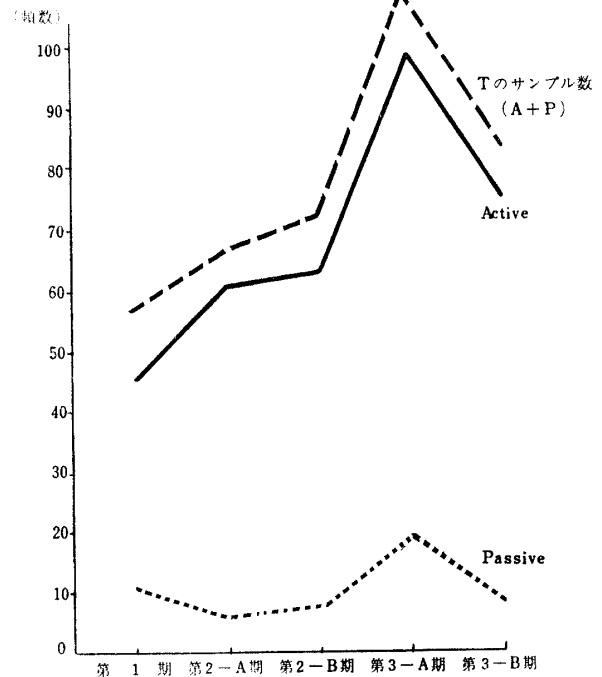


Fig. 0-8 Cの active と passive の頻数

は、passive はほとんど変化ないが、active は期の変遷と共に著しく増加する。特に第3期は、第1期の2倍にも達する。

以上の結果は、先に述べたTの動きと相対するものであり、Cの active verbal の増加は、逆にTの passive は verbal 及び behavioral の増加をもたらしている。百分率では、明快な傾向はでていないが、サンプル数で見るとかなりはっきりしている。ということは全体的に、CからTへの働きかけの絶対数(量)が増加していることを意味している。

(3) T-C関係について

Table 0-13は、T-C間の interaction の頻数を示しており、Fig. 0-9は、そのうち延べ頻数のみをグラフに表わしたものである。これらの表及び図を見て分るように

Table 0-13 T-Cの interaction の頻数

頻数	期	第1期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
1		1	13	3	21	5
2 ~ 4		2	7	3	12	6
5 ~ 8		0	0	1	4	0
9 以上		1	0	3	0	3
延べ頻数		29	31	63	75	53

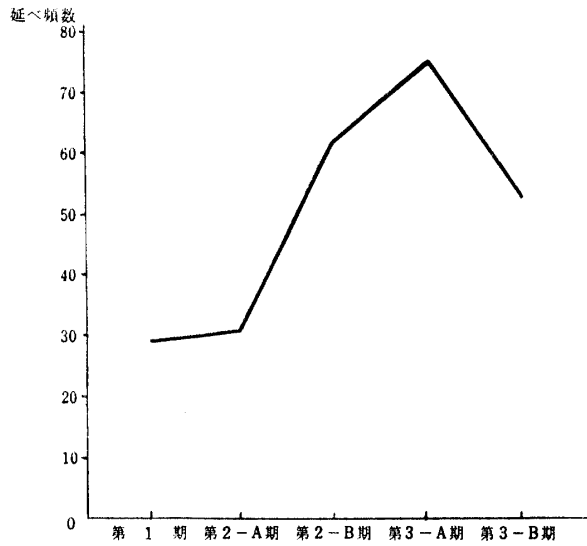


Fig. 0-9 T-Cの interaction の延べ頻数

第2-A期と第2-B期の間でかなり変化しており、T-C間の communicationが次第に増加していることを示している。第1期に於て interaction が25続いた状況があったが、これはCが、絵本を見ながらその内容を読んでいき、TがCの行動を応答・受容していくといったものであり、こういった特定のパターン化された遊びに於て関係を維持できたのであった。

(1) 及び (2) で時々触れてきたように、第2-B期での interaction の増加は、CからTへの verbal レベルでの働きかけが増大したことが最も大きな要因と思われる。この点をもう少し明らかにする為に Table 0-14 を見ていただく。これはCのverbal (「Ⅲ問いかけ」) な働きかけに対するTの反応の頻数をみたものである。見て分かるように第1期より第3-B期までのCのTに対する働きかけの頻数は増加しており、それは同時にTPVの増加をもたらし、このことは interaction の増加も意味

Table 0-14 Cのverbal (「Ⅲ問いかけ」) な働きかけに対するTの反応の頻数

Tの 카테고리			期	第1期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
T	A	B		0	0	0	2	0
T	A	V		0	4	3	3	3
T	P	B		0	0	0	0	0
T	P	V		14	17	29	36	24
無		し		1	2	2	10	5

Table 0-15 TのCに対する働きかけ方 (ブレンドを含む)

働きかけ方		期	第1期	第2-A期	第2-B期	第3-A期	第3-B期
単			16(59.3)	19(59.4)	23(79.3)	26(61.9)	15(55.6)
物			11(40.7)	13(40.6)	6(20.7)	16(38.1)	4(14.8)
身			0	0	0	0	7(25.9)
物	・ 身		0	0	0	0	1(3.7)
Total			27	32	29	42	27

() 内 百分率

するのである。即ちCの active verbal の増加、及びCAVに対しTが passive verbal で受けていることによって interaction の増大がみられたのである。

次に interaction との関連でTのCに対する働きかけを見てみよう。Table 0-15は、TのCに対する働きかけ方、即ちどのような媒介を経てCに働きかけるかを表に示したものである。第1期から第3-A期までは、「単」と

「物」のみであり、しかも「単」での働きかけが割合多いが、第3-B期に入って始めて「身体」を介しての働きかけがみられるようになった。これは前年度の紀要に述べたように、第3期に入っていわゆる「甘え」がみられるようになり、TがCを抱いたり、振り回したりしても、Cがそれを十分受け入れ、楽しめる状況であった。また逆にCから盛んにTに身体接触を求める時期でもあった。

自閉症に関する研究

Table 0-16 Tの働きかけに対するCの反応

反 応 \ 期	第 1 期	第 2—A期	第 2—B期	第 3—A期	第 3—B期
有	7(35.0)	13(50.0)	7(33.3)	27(69.2)	13(52.0)
無	7(35.0)	7(26.9)	14(66.7)	8(20.5)	7(28.0)
無 (物)	6(30.0)	6(23.1)	0(0)	4(10.3)	5(20.0)
Total	20	26	21	39	25

() 内 百分率

Table 0-17 Tの働きかけ方(単)に対するCの反応の頻数とその百分率

Cの反応 \ 期	第 1 期	第 2—A期	第 2—B期	第 3—A期	第 3—B期
無	4(40.0)	3(17.7)	14(66.7)	4(10.7)	4(26.7)
無 (物)	4(40.0)	5(29.4)	0(0)	3(12.5)	3(20.0)
C A B	0(0)	1(5.9)	2(9.5)	3(12.5)	1(6.7)
C A V	0(0)	5(21.4)	0(0)	5(20.8)	2(13.3)
C P B	0(0)	0(0)	5(23.8)	0(0)	0(0)
C P V	2(20.0)	3(17.7)	0(0)	9(37.5)	5(83.3)
Total	10	17	21	24	15

() 内 百分率

次にTのCへの働きかけに対するCの反応をみてみよう (Table 0-16)。全般的にTの働きかけに対しCの反応有りは、第3期に入って6割前後は必ず戻ってくることを示しているのではないか。しかし余り明確なことは必ずしもいえない。

なおTの働きかけ方、即ち「単」「物」「身」「物・身」かによってCの反応にどのような傾向がでるかを見たのが Table 0-17(「単」について)である。特定の傾向が見出されなかったので他のFig.は省略する。

以上のように interaction に関しては、TのCに対する働きかけ方及び量の問題を分析しても、特定の傾向は見出されなかった。

本児の場合、上述してきたように第1期から第3—A期まである一定の傾向をもって変ってきたように思われるが、第3—B期よりは前の期とは違って質的に違っているように若干思われるが、第3—B期以降の分析をすることによって明らかになるように思われる。

(4) 治療による変化の要約とビデオ分析の関連について

本児は、昭和44年6月より、1年3ヶ月の間に2週に1度の遊戯治療を計16回に亘って行なってきた(第1期と第2—A期の間約7ヶ月中断したが)。その後本児は

昭和46年3月にこのグループから離れ、4月より1月1回の個人遊戯治療を続け、昭和46年10月より2週に1度の集団遊戯療法(セラピスト1人、自閉症児3人という形態での治療)を行なってきたり現在も継続中である。

ところで中継の前後即ち第1期と第2—A期の本児の遊びは、水遊びと飛行機にほとんど限られており、セラピストは本児に active にかかわろうとしても拒否され続けてきた。第2—A期の頃より次のように本児の行動は変化してきた。

- 1) 興味の幅が広くなり、特定の遊びに固執することが少なくなってきた。
- 2) セラピストに身体接触を求めることが多くなり、セラピストと本児と一緒にふざけたりして情緒にかかわり合う体験が増加してきた。
- 3) 他の子供、他のセラピストに次第に関心を示すようになった。

以上のような変化は、セラピストの主観によってなされたわけであるが、ビデオを通しての本研究方法に従って期を分けるとすると若干異なってくるように思われる。即ち第2—B期より次の点での変化がみられた。(a) 単位時間あたりのサンプル数の増加、(b) interaction の

急激な増加, (c) CAV「皿問いかけ」の増加, (d) Tの active の減少と passive の増大, これを裏返すものとしてのCの active verbal の増加。

また第3—B期は, 第2—B期及び第3—A期に比して, いろんな側面に於てやや異なっている。特に身体を介した相互の働きかけ合いがあった点が最も重要と思われる。

以上の点から, ビデオ分析に基づいて期を分けるならば, 第1期と第2—A期を一群, 第2—B期と第3—A期を一群, そして第3—B期を一群としてこのように3つの期に分けることができるであろう。

(神野秀雄, 生越達美)

V VTRによる行動分析法への考察

われわれは, 上述のように, 治療期間1年1ヶ月～1年2ヶ月のほぼ同じ時期に行なわれた遊戯療法による治療過程をVTRによって撮影, 保存したものを再生する方法を用いて, 治療者(T), 被治療者(C)それぞれの治療中の動きと, T↔Cの関係の変化を行動分析カテゴリーにもとづいて分析し, 治療時期によって, それぞれの変化を追跡した。

この方法は, 従来, 治療者の記述と, 被治療者の行動や現象の変化の記述によってしか把握することが出来なかった治療過程を客観的に把握する方法として, 新たに試みたものである。

3つの事例は, いずれも自閉症でも, それぞれ特徴をもち, 異なったタイプと思われるが, この方法の分析を行なうことによって, 病態像や, 治療者とのかかわりのちがいなどもかなり正確に再生することが出来たと考えられる。

今回の試みによって, 経験したこの方法のもつ諸問題点について述べてみよう。

1. 利 点

既にふれたように, 記述による方法で伝達することしかできにくかった臨床における治療の成果と, 治療過程における治療者の行動, 被治療者の行動及び両者のかかわり方についての把握が, かなり正確に追跡できるということは, 最も中心的なすぐれた点であるといえる。一方, 遊戯療法の治療者の訓練という面で, VTRを用いて, 再生, 検討することは, 既に実施されているであろうが, VTRを視覚的に再生することのみでなく, 治療者, 被治療者の動き, かかわりを今回のような一定の分析カテゴリーにあてはめて, 記録して, 分析してみると, 時間的にやや多くの負担がかかるが, 動きの正確な追跡が把握される点で, 可成り有効なもののように思

われる。

われわれの3事例は, 本紀要17巻のなかで述べたように, 集合的個人遊戯療法という方法を採用したもののなかのケースであって, 隔週1回の治療のあと, 常にVTRや行動分析室で観察していたグループの他のメンバーによって, 治療者のうごき方を討議, 検討してきたので, 被治療者とのかかわり方については, 今回の結果をみても, 充分とはいえないが, 各治療者とも, かなり有効な動きをしていることがわかった。

しかし, 一方, この分析を通しての経験では, 治療者の訓練に, この方法をいかすことによって, 一層多くの成果を上げうると考えられる。

2. 限界と思われる点

VTRのもつ利点は, 可成り忠実に場面状況を再生することにあるが, 一方, いくつかの点で, 限界をもつものであることもわかった。そのなかの主なものは, 治療者や被治療者の内面的なうごきは, 行動のシークエンスを追うことによって, ある程度把えることは可能であるが, 完全に再生し得ない点が最も重要な限界点である。今回の3事例でも, 内面的なうごきが比較的よくVTRの分析のなかに把えることができた事例がある反面, 治療者と被治療者のかかわり方がVTRでは, 充分把えられない傾向のある事例もあった。

即ち, 自閉症児の治療場面では, 一般の情緒障害児の治療の場合と, かなりことなってきたかかわりがあり, 且つ自閉症の病態像によって, 未発達な閉ざされた自我は, 対人的関係をもつように変容, 発達してゆく過程に相異があるので, このような現象が随伴することも止むを得ないことと思われる。

3. その他の問題点

次は, VTRの技術的面に関連することであるが, ことに今回は, 集団的治療の場面で撮ったため, 最も適当な場面, 状況の録画を得ることは必ずしもできていない。

このことは, 個人治療の場面の録画ならば, 克服できることである。更に, 今回のように, ある時間帯を継続して分析するため, かなりの労力が必要となる。従って, われわれは, 10分間を一応規準として抽出したが, この10分が最適か否かも検討する必要がある。約50分～60分の1回のsessionのうち, どの部分の10分間を抽出するか, 5分間づつ, 前半, 後半とわけるのが適当なのかどうかなどである。

次に, この方法は, 継続治療の過程を分析するので, 第1期, 第2期と区別する規準をどこにおくかということと, その時期のうち, 第何回目を分析対象に選択し

たらよいかという問題である。

今回の研究では、前回の本紀要の論文の時期の分け方は、担当治療者の判断によって、治療的变化のみられた時期にわけたので、そのまま今回も各時期の区分をいかした。しかし、事例によっては、2ヶ月程度の場合もあったり、半年近く間があいていたりしている。

この点、更に検討する必要がある。又、ある時期のどの回数ものを選択するかという問題は、治療的意味からみて最も適当と思われる回数のものでよいわけであるが、今回のわれわれの場合は、方法のところ触れたように、集合的個人遊戯療法の場面ということでVTRの個人別の撮影、録画された部分などを考慮したためにかなり制約をうけている。従って、ある時期の最も代表的と思われる回数を選択したとは云えない。もし、上述のように、この点、もっとのぞましい配慮がなされれば、われわれの分析の結果は、各事例において、今回以上の変化を治療過程のなかから、把握できたのではないかと考えられる。

Ⅵ まとめ

以上、VTRを用いての行動の分析による治療過程の分析について、予め検討し、作成した行動分析カテゴリーにもとづいて、治療者、被治療者の動き、及び両者の

かかわりの変化を追跡した結果、この方法は、従来の記述的レベルでの治療過程の分析に比して、客観性と正確性において、多くの寄与する面をもつ方法であることがわかった。

一方、今回の研究の対象となった3事例については、自閉症児のなかでも、代表的な特徴をもつ点で、比較することによって、従来からわれわれが意図していた治療過程の分析によって、自閉症の診断的基準の再検討の手がかりをうることが出来たと考えている。

この点については、別途、更に検討の上発表する予定である。
(1971年11月22日)

文 献

- 1) Coffey, H. S. & Winer. L. ; Group treatment of autistic children 1967
- 2) 丸井他, ; 自閉症に関する研究—集合的個人遊戯療法 (collective individual playtherapy) の試み—名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科 1970. vol.17. 36~116
- 3) 牛島義友, 湯川礼子, ; 保育者と乳幼児の相互作用の継続的研究 教育社会心理研究 第5巻 1966